

三田市

北摂ニュータウン内
遺跡調査報告書 VI

－有鼻遺跡(2)－

平成12年3月

兵庫県教育委員会

三田市

北摂ニュータウン内 遺跡調査報告書 VI

—有鼻遺跡(2)—

平成12年3月

兵庫県教育委員会

例 言

1. 本書は、兵庫県三田けやき台6丁目にする有鼻遺跡のうち、平成9年度に実施した確認調査、及び全面調査（有鼻遺跡その3）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、北摂地区新住宅都市建設事業（北摂ニュータウン）の関連であり、都市基盤整備公団関西支社の委託を受けて平成9年度に兵庫県教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は、確認調査及び全面調査共に単年度で行われた。実施年度及び其々の遺跡調査番号は下記の通りである。

確認調査	平成9年度	遺跡調査番号	970225
全面調査	平成9年度	遺跡調査番号	970325

4. 全面調査は、三菱建設株式会社と作業委託を交わして実施した。
5. 現場での遺構等の実測・写真撮影は、調査員および調査補助員が行った。
6. 全面調査における航空写真測量は2回実施したが、全て株式会社バスコに委託した。
7. 整理作業は、平成10・11年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において実施した。
8. 遺物写真撮影は、株式会社衣川に委託して実施した。
9. 金属器の保存処理は、加古千恵子の指導により、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所にて行つた。
10. 本書の執筆は、調査担当者等で分担し、本文目次にも記載している。また、特に石器については、高木芳史の執筆協力を得た。記して謝意を表するものである。なお、原稿については、調査担当者の文意等を尊重する意味で、大幅な加算、訂正等は行っていない。従って、文章中の内容上不具合な点については、全て編集者に責任がある。
11. 本書の編集は、古谷章子の補助を得て、深江英憲が行った。
12. 本書の遺構及び遺物における用語・分類等については、一部を除き、先に刊行した調査報告書『有鼻遺跡（1）－本文編－』で使用したものと基本としている。
13. 本書に使用した方位は国土座標V系を基準にし、水準は東京湾平均海水準（T.P.）を使用した。また各遺構図面で使用している方位は、座標北を指す。
14. 本書に使用した遺跡位置図等の地図については、先に刊行した調査報告書『有鼻遺跡（1）－図版編－』で使用したものを基本としている。
15. 本報告書で使用した遺物・写真・図面は、全て兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で保管している。
16. 発掘調査においては、調査補助員・室内作業員の紹介をはじめ、三田市教育委員会の方々からの温かい御協力や御教示をいただいた。また、整理作業の際には、多数の方々からの御協力や御教示をいただいた。心より感謝の意を表するものである。

目 次

第1章 はじめに

第1節 調査にいたる経緯	（深江英憲）	1
1. 発掘調査にいたる経緯		
2. 有鼻遺跡（その1）・（その2）から（その3）へ		
第2節 発掘調査の経過	（深江）	1
第3節 整理の経過	（深江）	3
1. 平成10年度		
2. 平成11年度		

第2章 有鼻遺跡の調査

第1節 遺跡の概要	（深江）	5
第2節 確認調査	（深江）	5
第3節 全面調査の方法	（深江）	7
第4節 遺構	（渋谷格・深江）	8
1. 概要		
2. 弥生時代の遺構		
3. その他の時代の遺構		

第3章 出土遺物

第1節 土器	（深江）	14
第2節 石器	（高木芳史）	14
第3節 金属器	（深江）	14

第4章 風呂ヶ谷城跡の調査

第1節 概要	（鈴木卓）	26
第2節 遺構	（鈴木）	27
第3節 出土遺物	（深江・高木）	27

第5章 まとめ

第1節 有鼻遺跡出土の土器埋設土坑について	（深江）	29
-----------------------	------	----

挿図目次

第1図	平成10年度整理作業風景	4
第2図	平成11年度整理作業風景	4
第3図	風呂ヶ谷城作業風景	5
第4図	確認調査出土土器	6
第5図	土器埋設土坑7出土土器	13
第6図	下井沢風呂ヶ谷城出土土器	28
第7図	土器埋設土坑と居住施設との位置関係	30

表 目 次

表1	出土弥生土器観察表	17
表2	器種別出土量	22
表3	出土石器法量表	24

図版目次

図版1	調査区位置図	図版1 8 遺物 A地区出土土器②
図版2	確認調査トレント位置図	図版1 9 遺物 A地区出土土器③
図版3	A・B地区遺構配置（前調査区を含む）	図版2 0 遺物 A地区出土土器④
図版4	遺構 堪穴住居跡64	図版2 1 遺物 A地区出土土器⑤
図版5	遺構 炉状遺構1・2	図版2 2 遺物 B地区出土土器
図版6	遺構 堪穴住居跡71	図版2 3 遺物 B地区・C地区出土土器
図版7	遺構 堪穴住居跡72・73	図版2 4 遺物 有鼻遺跡出土石器①
図版8	遺構 堪穴住居跡74・75	図版2 5 遺物 有鼻遺跡出土石器②
図版9	遺構 堪穴住居跡76	図版2 6 遺物 有鼻遺跡出土石器③
図版1 0	遺構 形状遺構87・88	図版2 7 遺物 風呂ヶ谷城出土石器
図版1 1	遺構 握立柱建物9・柱穴列5・6	
図版1 2	遺構 柱穴列7・8・9・10	
図版1 3	遺構 溝2・土坑7	
図版1 4	遺構 土器埋設土坑7・8	
図版1 5	遺構 風呂ヶ谷城遺構配置図	
図版1 6	遺構 風呂ヶ谷城現況対応図	
図版1 7	遺物 A地区出土土器①	

写真図版目次

- 図版 1 有鼻遺跡・風呂ヶ谷城 有鼻遺跡・風呂ヶ谷城全景（上空から）
- 図版 2 有鼻遺跡・風呂ヶ谷城 遺跡遠景（南から・北から）
- 図版 3 有鼻遺跡 A・B地区近景（上空から）、C地区近景（南から）
- 図版 4 有鼻遺跡 遺構 A地区南側（東から）、A地区北側（東から）
B地区南側（西から）
- 図版 5 有鼻遺跡 遺構 壊穴住居64（南西から）、中央土坑断面（南西から）
壊穴住居64（北東から）
- 図版 6 有鼻遺跡 遺構 壊穴住居64内炉状遺構1（北から）、炉状遺構2（南から）
壊穴住居71（北から）
- 図版 7 有鼻遺跡 遺構 壊穴住居72（北から）、中央土坑（北から）
壊穴住居73（北から）
- 図版 8 有鼻遺跡 遺構 壊穴住居74（北から）、壊穴住居75（北から）
壊穴住居76（北から）
- 図版 9 有鼻遺跡 遺構 段状遺構87（北から）、段状遺構88（北東から）
段状遺構88（北から）
- 図版 10 有鼻遺跡 遺構 溝2（東から）、土層断面（東から）
土坑7（東から）
- 図版 11 有鼻遺跡 遺構 土器埋設土坑7 検出状況（真上から）、半截状況（北から）
埋土除去状況（北から）
- 図版 12 有鼻遺跡 遺構 土器埋設土坑8 検出状況（北西から）、完掘状況（北西から）
P1 土器出土状況（南から）
- 図版 13 風呂ヶ谷城 風呂ヶ谷城・有鼻遺跡遠景（上空から）、風呂ヶ谷城遠景（上空から）
- 図版 14 風呂ヶ谷城 風呂ヶ谷城遠景（上空から）、風呂ヶ谷城近景（西から）
- 図版 15 風呂ヶ谷城 堀切1・溝1土層断面（南西から）、堀切1土層断面（西から）
堀切1の土墨土層断面（西から）
- 図版 16 調査風景
- 図版 17 遺物 確認調査出土土器
- 図版 18 遺物 A地区包含層出土土器①
- 図版 19 遺物 A地区包含層出土土器②
- 図版 20 遺物 A地区包含層出土土器③
- 図版 21 遺物 A地区包含層出土土器④
- 図版 22 遺物 A地区包含層出土土器⑤

- 図版2 3 遺物 竪穴住居72出土土器
- 図版2 4 遺物 P 1, 溝2, 土器埋設土坑7・8, 金属器
- 図版2 5 遺物 B地区包含層出土土器①
- 図版2 6 遺物 B地区包含層出土土器②
- 図版2 7 遺物 竪穴住居74出土土器
- 図版2 8 遺物 C地区包含層出土土器
- 図版2 9 遺物 風呂ヶ谷城出土土器
- 図版3 0 遺物 A地区包含層出土土器①, A地区包含層出土土器②
- 図版3 1 遺物 A地区包含層出土土器③, A地区包含層出土土器④
- 図版3 2 遺物 竪穴住居71・72, P 1・2, 溝1出土土器
- 図版3 3 遺物 B地区包含層出土土器③, 竪穴住居74出土土器
- 図版3 4 遺物 有鼻遺跡出土石器①, 石包丁顕微鏡写真
- 図版3 5 遺物 有鼻遺跡出土石器②, 磨製石斧顕微鏡写真
- 図版3 6 遺物 有鼻遺跡出土石器③
- 図版3 7 遺物 風呂ヶ谷城出土石器

第1章 はじめに

平成7年1月17日早朝、兵庫県に未曾有の大被害をもたらした阪神・淡路大地震の発生は、私達の平穏な日常を一変させた。一瞬の出来事は、多くの人々の命を奪い、建物や道路を破壊したばかりでなく、人と人との心の奥底までも暗い影を落とした。そして、一刻も早い人・物・心の復興が呼ばれた。無論、今回我々が行った発掘調査、その成果を一刻も早く公表する事も、復興に対する気持ちの現れであることは、担当者としての偽らざる気持ちである。

第1節 調査にいたる経緯

1. 発掘調査にいたる経緯

有鼻遺跡の調査の経緯については、先に刊行された『有鼻遺跡（1）』において詳細な記述がなされている。従って、その記載については内容が重複するので割愛する。『有鼻遺跡（1）』を参照されたい。

2. 有鼻遺跡（その1）・（その2）の調査から有鼻遺跡（その3）へ

平成7年度までに調査を終了した有鼻遺跡（その1）・（その2）は、調査成果の早急の公表が求められたため、翌平成8年度には、発掘調査報告書『有鼻遺跡（1）』の整理作業を開始したので、その時点では、全面調査対象地区の全ての調査を終了した筈であった。ところが、平成7年度当初、有鼻古墳群の隣接地については、緑地として保存が決定していたものが、平成8年度に有鼻古墳群の保存に伴う事業路線変更により、造成計画上緑地部分の保存が困難という回答、加えて古墳群及び下井沢風呂ヶ谷城を活用して緑化公園とする要望が提示された。その結果、次項に述べる追加調査を行う事となったのである「有鼻遺跡（その3）」。

第2節 発掘調査の経過

有鼻遺跡の発掘調査は、北摂地区新住宅市街開発事業（北摂ニュータウン）に先立つ平成7年度の全面調査において丘陵上約3,7000m²、集落のほぼ全域の調査を終了した。

しかし、前項に記載の通り、緑地保存地区としていた部分が、計画変更等のために保存が困難となり、遺跡に影響を及ぼす問題が浮上した。このため、公團と協議を重ねた結果、平成9年度に古墳の埴丘及び下井沢風呂ヶ谷城の曲輪部分を除く事業対象範囲について、確認調査及び全面調査を実施する事となった。

1. 確認調査

前年度の公團との協議を受けて、平成9年6月に兵庫県職員1名、支援職員1名により、確認調査を実施した。支援職員については、調査に入る間際まで兵庫区の国道沿いの調査に従事していたが、支援職員担当地区の調査が終了するのを待つ形で、確認調査に移行していった。

確認調査は、当該地の要所に陸時トレント掘削を行い、合計23箇所のトレントをあけ、平成9年6月に終了した。

平成9年度確認調査の体制

確認調査（遺跡調査番号970225）

復興調査班 本県職員 主 任 久保弘幸

支援職員 石崎善久（京都府）

2. 全面調査

全面調査は、確認調査の結果を受けて、平成9年9月29日に全面調査を開始した。

有鼻1・2号墳の周辺部については、既に平成7年度に全面調査を終了した「有鼻遺跡（その2）」北側及び東側の調査区を更に延長する形であり、特に北側の谷部では堅穴住居64か、前回南半分のみの調査だったため、少なくともこの部分周辺での遺跡の広がりは期待できた。また、有鼻遺跡東側の谷を隔てて、更に東側の尾根上にある下井沢風呂ヶ谷城でも、現状でもその痕跡を残す掘切りが、確認調査の結果からも事業対象地内にかかる事が分かっており、他の掘切りについても現況の地形である程度予測できたので、遺構検出は容易であった。ただし、風呂ヶ谷城に関しては、その急峻な斜面地での掘削だったことから、危険度はかなり高く、実際に斜面上での掘削中に転んで掘切りの最も低い場所まで落ちたり、上で掘削した土中に混入した礫や伐根が転がって、下で廃土処理をしている作業員にぶつかりかけるなど、困難な条件下にあった。

全面調査は、兵庫県職員1名、支援職員2名の計3名で担当した。調査は有鼻遺跡が大きく3地区、風呂ヶ谷城も含めて4地区に分かれており、各地区に担当職員をつける事も考えたが、現場での書類管理で抜けることの多かった職員1名がいた為に、現場での調査は残りの2名が中心となって実施した。

その間、有鼻遺跡と風呂ヶ谷城との間の谷から廃土等から泥水が下流に流出しないようにとの公団の意向から、排水管の埋設や土留め工等の養生を施すなどの若干の問題を孕みながらも、調査自体は順調に進み、平成10年2月20日に終了した。

平成9年度全面調査の体制

全面調査（遺跡調査番号970325）

復興調査班 本県職員 技術職員 深江英憲

支援職員 鈴木 卓（山口県） 渋谷 格（佐賀県）

調査補助員 田中 妙 菅本啓子 明石久美子 伊福千加子

室内作業員 北山由紀子 西山はるみ 楠田泰枝 板手典子

第3節 整理の経過

出土した遺物は、土器及び石器については殆ど全て現場での洗浄を行った。土器については、出土時から非常に軟弱であったため、バインダー処理による器物保護を行った。

有鼻遺跡の調査成果の報告については、先の調査報告書『有鼻遺跡』の拡張部といった性格から、その未調査部分を補完するものとして、調査成果の早急の公表が望まれる一方、本調査をもって北浜ニュータウン関連の発掘調査が全て終了し、事業計画の工期も平成11年度までといった時間的制約の中で、発掘調査終了後の継続的な整理計画の着手が求められた。そこで、平成10年度より2年計画で整理作業を開始した。

なお、整理作業にあたっては、平成9年度をもって復興調査の支援期間が終了したため、其々の派遣元に戻った派遣職員が直接整理作業に従事することはなかったが、各氏とも仔細な解析を加えた図面及び活字を残して帰られ、無力な編集担当者としては、感謝の至りであった。

平成10年度の整理

平成10年度は、先ず魚住分館において、洗浄後の土器のバインダー処理を行った。発掘調査の現場事務所において途中までバインダー処理していたが、あまり効果が得られていなかったため、再度処理を施した。

ネーミング・接合・補強 現場事務所での作業で作成した遺物台帳を基に、埋蔵文化財調査事務所においてネーミングを開始した。ネーミング作業終了後、即接合・補強作業に移行した。

接合した土器から実測するものを選びだし、必要なものについては、補強を行った。

遺物実測 実測点数は、土器188点、石器35点、金属器2点である。遺物実測については嘱託員を行い、修正等の必要があれば職員が指示し、その手直しは嘱託員が行った。

復元作業 復元作業は、土器の写真撮影を行う中で、特に必要なものについて職員の指示の下、嘱託員が行った。

遺物写真撮影 遺物写真是、土器・金属器については職員の指示の下、嘱託員の補助によりカメラマン（株式会社 衣川）に撮影を委託して行った。また、石器については研修員高木芳史の指示の下、嘱託員が立ち会いカメラマンが撮影した。

航空写真測量図 発掘調査時に、株式会社バスコに作業委託し、2回の航空測量を行った。有鼻遺跡では、1/50の区画図面と1/100の全体図、風呂ヶ谷城は1/200の区画図面と1/400全体図、また、有鼻遺跡・風呂ヶ谷城の其々を合成した写真を作成した。

平成10年度の整理の体制

整理担当職員 整理普及班 主査 加古千恵子（保存処理担当）

技術職員 長濱誠司

復興調査班 技術職員 深江英憲

整理技術嘱託員 古谷章子 八木和子 宮田麻子 小山みゆき 本庭田英子 石野照代 茨木恵美子
飯田章子 佐伯純子 鈴木まき子 横山キエ 竹内泰子 岸野奈津子 岡田美穂
真子ふき恵 宮野正子 縮小路公子 川村由紀 前田恭子 岡井とし子
(保存処理担当) 栗山美奈 和田寿佐子 前川悦子 藤川紀子



第1図 平成10年度整理作業風景

平成11年度の整理

本年度の作業は、昨年度の作業に統一して、先ず遺物実測図及び遺構図のレイアウトから開始し、トレークス作業及び写真図版レイアウト等、報告書刊行までの全ての作業を行った。

なお、全ての作業については職員の指示の下、嘱託員が行った。

平成11年度の整理の体制

整理担当職員 整理普及班 技術職員 長濱誠司

調査第3班 技術職員 深江英憲

整理技術嘱託員 古谷章子



第2図 平成11年度の整理作業風景

第2章 有鼻遺跡の調査

第1節 遺跡の概要

有鼻遺跡は、三田市けやき台6丁目に所在し、武庫川上流右岸の武庫川支流である平谷川との合流部分に北へ張り出す標高約190～210mの丘陵上に立地する。丘陵は、平野部分から急激に立ち上がる段丘地形の地形を呈するが、平野との比高差約55mの丘陵上では、高低差の少ないフラットな地形が広がる台地状である。従って、一度丘陵上に登ると、東側は武庫川周辺の平野部分や対岸の段丘上は勿論のこと西側は美嚢川流域周辺の丘陵まで非常に眺望のきく立地である。

遺跡は、丘陵上のフラットな部分に竪穴住居及び掘立柱建物を中心とした遺構を多く検出し、斜面地上では所謂段状遺構及び柱穴列状遺構をほぼコンターラインに沿う様な形で検出した。平成7年度の発掘調査では遺跡のほぼ全域を調査したが、今回の調査はその延長部分の調査ということもあり、前回の調査成果を補足するものと言える。



第3図 風呂ヶ谷城作業風景

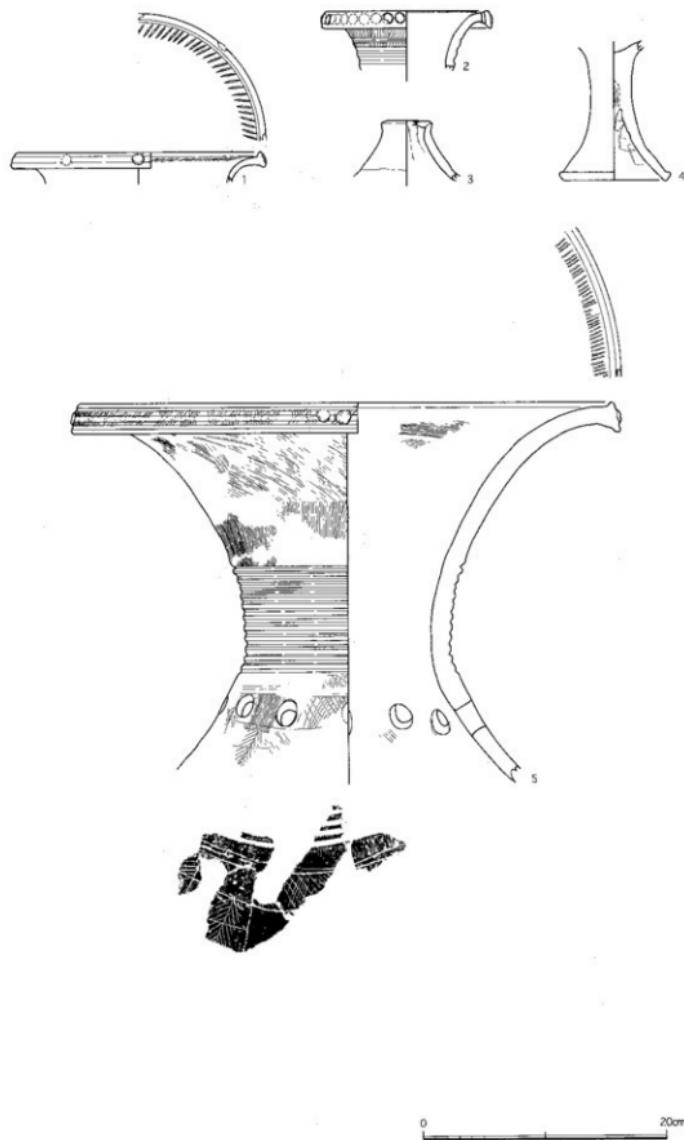
第2節 確認調査（図版2）

確認調査は、事業対象地域の中でも、有鼻2号墳の東側の谷から風呂ヶ谷城の西側斜面までに23箇所のトレンチを設定し、重機及び人力による掘削を行った。その内、2本のトレンチから段状遺構と考えられる遺構（全面調査の段階で遺構の検出に至らなかった）と遺物が出土した（第4図）。

確認調査で出土した遺物は、全て包含層からであったが、図化可能な遺物が僅少であることから、本来であれば「第3章 出土遺物」で記述するところだが、改めて別項をもうける必要もないでの、遺物の解説、特に土器については本項で行う事とする。また、石器については「第3章 第2節 石器」で一括する。以下、土器の解説を行う。なお、土器の解説は「第3章 出土遺物」の分類に従う。

1は口縁端部のみであるが、広口壺Aであろう。2は広口短頸壺Aの口縁部を考える。3は蓑笠状を呈する蓋である。4は杯部上のせ技法による高杯の脚部である。5は器台Aの範疇となるが、脚台部の径より受部の径が大幅に上回り、加飾するタイプの器台である。

以上、確認調査の結果からは、遺構の密集度の希薄さが目立ち、集落の縁辺部をイメージさせるものであった。しかし、トレンチから出土した遺物は、図化したもの以外でも特に土器の出土量は比較的多く、遺跡が広がることは充分に窺える状況であった。



第4図 確認調査出土土器

第3節 全面調査の方法

全面調査は、平成9年度の確認調査に基づいて実施した。

掘削は、表土及び木根の除去について重機を使用し、包含層以下及び遺構面の精査、遺構掘削については人力によって行った。遺構掘削の終了後、遺跡を含めた周辺の遠景及び近景、遺跡の垂直及び斜めカットの写真を含めたヘリコプターによる航空写真測量を株式会社パスコに委託して、有鼻遺跡の調査時と風呂ヶ谷城の調査時の合計2回に渡り行った。また、遺構の配置及び各遺構の個別撮影等については、写真撮影用足場による撮影を行った。

1. 地区の設定について（図版1）

全面調査区は、有鼻1・2号墳が位置する尾根を中心とする東西の谷と尾根、あるいは谷で隔された尾根上など、連続性に欠ける事から、地形の状況も鑑み、A・B・C及び風呂ヶ谷城の4箇所を大区割りとして設定した。また、調査段階では各大区割りの中で、遺物の取り上げの関係上小区割り（例えばA-北、A-南1・A-南2等）を設けたが、遺物の出土する地区がある程度限定されるので、報告段階では大区割りでまとめた。

A地区

有鼻1・2号墳以西の谷及び尾根である。谷部では、『有鼻遺跡（1）』の64号竪穴住居の北半部がかかり、谷地形の中にあって落ち際からやや平坦になる傾斜変換点までが調査区となる。また、北向きに張り出す尾根部は、尾根の頂部から落ち際までが調査区となる。

B地区

有鼻1・2号墳以東側の尾根である。地形は、ほぼ東面する僅かな平坦部と急峻な斜面地上である。

C地区

B地区的谷を隔てて南側の尾根上に位置する。『有鼻遺跡（1）』の32・36号竪穴住居の東半部がかからはずだが、先の調査の結果では東側は流失してしまったということである。

風呂ヶ谷城地区

有鼻遺跡A・B・C地区の、急峻な谷地形を隔てて東側に位置する。風呂ヶ谷城本体の西側の斜面地は谷に向かって更に傾斜を増し、崖状になる所までを調査区としている。なお、風呂ヶ谷城については以後、別項にて記載する。

2. 遺構名の記載について

調査区割りについては上記の形で行ったが、遺構については報告書用に再整理したものを記述することとした。従って、遺構の記述時は地区を越えるが、各遺構内でA・B・C地区の順序に記述することとした。遺構名は、竪穴住居・掘立柱建物・柱穴列・段状遺構・溝・土坑・ピット・土器埋設土坑といった記述とした。例えば、64号竪穴住居は（竪穴住居64）、87号段状遺構は（段状遺構87）、また1号ピットは（P1）のようになる。

第4節 遺構

1. 概要（図版3 写真図版1・3）

本調査において検出した遺構は、A・B地区に集中し、前調査区とも地形的に継続性を持っており、遺構も一部重複している。（図版3 写真図版3）

ところで、C地区については、急斜地で地滑りや土砂の流失などにより明確に遺構といえるものが検出できなかったので、個別図面の掲載は割愛した。（写真図版3）

2. 弥生時代の遺構

有鼻遺跡で検出した遺構は、殆どが弥生時代のものである。同時代の遺構は、概ね中期後半の範疇に属するものであるが、遺構の重複関係や、谷部において多量の土器が集積した包含層を切る遺構もあり、幾つかの小時期に細分されるようである。しかしながら、遺構内出土が土器の量的、質的に乏しいため、遺構の詳細時期（特に竪穴住居の存続時期）までは踏み込めない現状にある。従って、ここでは具体的な細分にまでは触れない事とする。

（1）竪穴住居

竪穴住居は、A・B地区の北向き斜面において大小7棟を検出した。

竪穴住居64（図版4・5 写真図版5・6）

検出状況 A地区谷部で検出した。本遺構は、平成7年度の全面調査において南側半分が調査されており、今回の調査でその北半分を検出した。北側（谷側）の掘形は、削平により不明である。

形状・規模 平面形は、谷地形の影響か、不整な楕円形状を呈する。規模は、東西幅10.3m、南北復元幅9.3mを測り、今回検出した竪穴住居の中でも最も大型のものである。また、施設内にもう一重周壁溝を検出しており、拡張前のものか切り合い関係にあるものと考えられるが、何れにせよ直径約6.8mの古い小型住居（64-1）から新しい大型住居（64-2）といった前後関係が窺える。

屋内施設 竪穴住居64-1には、周壁溝、柱穴、中央土坑がある。主柱穴と考えられる柱穴は3ヶ所で確認したが、本来は4本柱であったと考えられる。中央土坑は数度の掘り直しがあった内の最も早くに使用したものと考えられる。

竪穴住居64-2には、周壁溝、柱穴、中央土坑及び炉状遺構がある。主柱穴と考えられる柱穴は、7～8本と考えられるが、不明である。中央土坑は、掘り直したものの中でも、最も新しい段階のものである。

炉状遺構は、2基検出した。炉状遺構1は、床面上に南側開放の馬蹄形に被熱した赤変部として確認し、馬蹄形の中央には直径約0.4m、深さ約0.08mの円形に掘りくぼめている。遺構は、断割りの結果、やや掘り下げた床面上に約1mの範囲で、黄褐色系粘質土による貼り床を施しているのを確認した。

炉上遺構2は、基本的には北西側開放の馬蹄形を呈すると考えられ、赤変した被熱部分の内側には、直径約0.25mの円形に掘りくぼめられていた。これについても、周辺床面を若干掘り下げ、粘質土による貼り床を施している。

以上の2基の炉状遺構の他、中央土坑付近には炭化物を含む小土坑が4基ほど切り合い関係に有りな

がら存在し、また床面全体に被熱による赤変部が点在する事を踏まえると、この住居が居住用というよりも、むしろ火を要した何らかの作業場的な施設であった可能性が高い。

出土遺物 床面直上と明示できるものは殆どなく、確實に住居に伴うものは非常に稀少であるが、土器の他、石器1点、鉄器2点が出土している。

竪穴住居71（図版6 写真図版6）

検出状況 A地区谷部の東側調査区境で検出した。

形状・規模 調査区境での検出で、北側（谷側）半分が削平され、東側半分に調査区がかかるといった条件下で、全体の約4/1程の確認となったが、形状は直径約5.6mの円形と考えられる。また、床面において周壁溝がもう一重する事から、建て替え若しくは2棟の切り合いの可能性があったが、土層の堆積状況から直径約6.0mになる内側の周壁溝を古い小型住居（71-1）、外側のものを新しい住居（71-2）とした。

屋内施設 71-1・71-2共に周壁溝と柱穴は検出されたが、中央土坑は確認できなかった。全体が把握できないが、主柱穴は恐らく4本であったと考えられる。また、71-2は床面の一部に被熱による赤変部を確認した。

出土遺物 床面直上の遺物は確認できず、埋土内で弥生土器が出土した。

竪穴住居72（図版7 写真図版7）

検出状況 A地区谷部の竪穴住居64の北側で重複する形で検出した。埋土の堆積状況から、竪穴住居72が新しい事が看取される。

形状・規模 平面形は北側を若干削平されるが、隅丸方形を呈し、東西幅2.3m、南北幅2.3mを測る。

屋内施設 周壁溝、柱穴、中央土坑を検出した。主柱穴となるものは、中央土坑に隣接する2本であり、中央土坑は円形の土坑に長楕円形が付設する、所謂「1〇」土坑である。円形の土坑には炭化物や赤変部の痕跡は無く、長楕円土坑側には埋土に5cmの炭化物層とその直上に赤変部を確認した。このような状況は、弥生時代の殿治造構によく見られるパターンと類似するようである。

出土遺物 床面直上の遺物は確認できず、埋土内で弥生土器が出土した。

竪穴住居73（図版7 写真図版7）

検出状況 A地区南側の北斜面地上の7年度調査区境で検出した。表土直下での検出時には、住居との認識はなかったが、掘削途中で周壁溝を確認した。前調査の段状造構81の延長であるが、検出時の状況から段状造構を付設するタイプの竪穴住居と理解した。

形状・規模 谷側（北側）は削平されて不明だが、東西幅3.2mの隅丸方形プランと考えられる。

屋内施設 周壁溝、柱穴を検出した。柱穴は何れも浅いが、周壁溝付近で確認した一本が主柱穴となり得るので、そうであれば、4本柱となろう。また、本造構の約0.6m南側では造構の一辺に平行する溝を検出したが、位置的に住居に付帯する施設の可能性が考えられる。

出土遺物 本住居に伴う遺物は出土していない。

竪穴住居74（図版8 写真図版8）

検出状況 B地区東側斜面地上で検出した。

形状・規模 谷側（東半部）は削平されて不明だが、南北幅3.6mの隅丸方形プランと考えられる。

屋内施設 周壁溝、柱穴を検出した。柱穴は何れも浅く、主柱穴は確認出来なかった。また、本造構とは別に据立柱建物が重複する可能性を秘めているが、不明である。

出土遺物 埋土内から弥生土器が出土している。

竪穴住居75（図版8 写真図版8）

検出状況 B地区東側斜面地上で検出した。

形状・規模 谷側（東半部）は削平されて不明だが、南北幅2.3mの隅丸方形プランと考えられる。

屋内施設 周壁溝を確認したが、柱穴や中央土坑は不明である。

出土遺物 埋土内から弥生土器が出土している。

竪穴住居76（図版9 写真図版8）

検出状況 B地区東側斜面地上で検出した。

形状・規模 谷側（東半部）は削平されるが、南北幅5.7mの隅丸方形プランと考えられる。

屋内施設 周壁溝、柱穴、中央土坑を確認した。周壁溝は北側床面に別の周壁溝らしき溝を確認し、建て替えがあった事を窺わせる。また、主柱穴と考えられるものは3ヶ所で確認したが、抜張前・以後の住居の主柱穴の分離が困難である。恐らくは、2本柱となろう。中央土坑は、炭化物を多く含む土坑がそれと考える。

出土遺物 床面上出土のものは少なく、殆どが埋土内出土であり、弥生土器が出土している。

（2）段状造構

段状造構はB地区で2基検出した。

段状造構87（図版10 写真図版9）

検出状況 B地区東側斜面地上で検出した。

形状・規模 谷側（東半部）は削平されるが、南北幅6.8mの細長い長楕円形のプランを呈する。

屋内施設 柱穴を6ヶ所で確認した。柱穴はほぼ平行に見えるが若干ずれがあり、柱間も一定出ないことから、2軒の据立柱建物の建て替えとの推察もできるが、ここでは一軒の横状に並ぶ施設と理解したい。

出土遺物 埋土から弥生土器が出土している。

段状造構88（図版10 写真図版9）

検出状況 B地区東側斜面地上で検出した。

形状・規模 谷側（東半部）は削平されるが、南北幅6.8mの不整楕円形プランを呈する。

屋内施設 柱穴を4ヶ所で確認した。柱穴は若干段状造構との軸を異にするが、3本が平行であり、据立柱建物の存在も考えられるが明確でない。

出土遺物 埋土から弥生土器が出土している。

(3) 挖立柱建物

挖立柱建物はA地区で1基検出した。

挖立柱建物9(図版11)

検出状況 A地区南側の平坦地で、前調査区境で検出した。

形状・規模 本年度調査区では、1間×1間の検出であったが、前調査区との図上での合成により、南北長2.2m、東西長4.0mの1間×2間であることが分かった。

付帯施設 挖立柱建物の北側でP1を検出した。P1は遺構内に数固体の土器が埋設され、挖立柱建物との共伴関係が成立するかは確かではないが、周辺遺構の状況からほぼ同時期と考えられる。

出土遺物 P1出土の弥生土器以外は、挖立柱建物に伴う遺物は確認していない。

(4) 柱穴列

柱穴列はA地区～B地区にかけて6基検出した。

柱穴列5(図版11)

検出状況 A地区南側の平坦地の、挖立柱建物9北側で検出した。

形状・規模 コンタラインにほぼ平行の状態で、柱穴9ヶ所が並列したもので、検出東西長11.1mを測る。

出土遺物 遺構共伴の遺物は確認していない。

柱穴列6(図版11)

検出状況 A地区南側の平坦地の、挖立柱建物9北側で検出した。

形状・規模 コンタラインにほぼ平行の状態で、柱穴5ヶ所が並列したもので、検出東西長7.1mを測る。

出土遺物 遺構共伴の遺物は確認していない。

柱穴列7(図版12)

検出状況 A地区南側の北面斜面地上で検出した。

形状・規模 コンタラインにほぼ平行の状態で、柱穴8ヶ所が並列したもので、検出東西長7.1mを測る。

出土遺物 遺構共伴の遺物は確認していない。

柱穴列8(図版12)

検出状況 A地区南側の北面斜面地上で検出した。

形状・規模 コンタラインにほぼ平行の状態で、柱穴4ヶ所が並列したもので、検出東西長5.1mを測る。

出土遺物 遺構共伴の遺物は確認していない。

柱穴列9(図版12)

検出状況 A地区南側の北面斜面地上で検出した。

形状・規模 コンタラインにほぼ平行の状態で、柱穴 5ヶ所が並列したもので、検出東西長3.6mを測る。

出土遺物 遺構共伴の遺物は確認していない。

柱穴列10（図版12）

検出状況 A地区南側の平坦地で検出した。

形状・規模 コンタラインにほぼ平行の状態で、柱穴 5ヶ所が並列したもので、検出東西長5.9mを測る。

出土遺物 遺構共伴の遺物は確認していない。

（5）溝

溝はA地区で1基検出した。

溝2（図版13 写真図版10）

検出状況 A地区北側の谷地形上の、竪穴住居71の北側で検出した。

形状・規模 コンタラインにほぼ直行の状態で、検出東西長8.4m、最大幅2.0mを測る。断面形はU字を呈し、深度は0.4mである。

出土遺物 埋土内から弥生土器が出土した。

（6）土器埋設土坑

土器埋設土坑はA地区で2基検出した。

土器埋設土坑7（図版14 写真図版11）

検出状況 A地区北側の尾根上の、ほぼ先端部で検出した。

土坑は長軸幅0.65m、短軸幅0.5mを測る長楕円形を呈する。埋設された土器は広口壺であり、やや斜位に近い横倒し埋設である。検出時は、上側の口縁部から胴上半部にかけて崩落及び削平により欠損した状態であった。調査者の見解では、「土器埋設後に土器内に納めるものの規模に合わせて意図的に土器を打ち欠いた結果生じたもの。」ということである。

土坑内から出土した土器は、ほぼ完形に近い上記のもの以外に、破片ながら別個体のものもあり、恐らく蓋に転用したものと考えられる。また、土器は床面から若干遊離しており、部分的に自然堆積の礫が露頭している事から、一定量の土砂（埋土）で土器の固定のための土入れを行ったと解せる。

埋設された土器内からは、土器以外特に出土遺物は確認できなかった。

埋設土器 112（第5図 写真図版11）

埋設土器 112は、土器埋設土坑7から出土した埋設土器である。他に出土した別個体土器は図化が困難であったため、ほぼ完形で出土した1個体のみ取り上げる。

器種は、広口壺Dである。

埋設土器内から出土した土器は、同一の個体である口縁部の他、複数個体の破片が混入していたが、何れも図化には至っていない。ところで、土器内に落ち込んだ口縁部は、殆ど全てが接合し、ほぼ完形の状態であった。口縁部内径が約12cmである。従前、この様な遺構の一解釈としては土器棺墓があった

が、遺骸の直接埋葬をするには、口縫部内径が小さ過ぎる。上記した調査者の見解を当てはめれば可能かもしれないが、開口した出土状況は、土圧といった二次的要因で生じた事も否定できない。土器自体に何ら特殊性は見受けられないが、唯一底部に焼成後穿孔を施す行為が、土器棺墓と解されるものに多く見られることが、この遺構を評価する上で一つのポイントとなろう。

土器埋設土坑 8

(図版14 写真図版12)

検出状況 A地区南側の北面斜面地上で検出した。

土坑は直径約0.65mを測るやや不整な円形を呈する。埋設された土器はやや斜位に近い直立位埋設である。検出時は、胸上半部が削平により欠損していたので、詳細は不明である。

土器内からは出土遺物は確認できなかった。なお、土器の記述については、別章で行う。

2. その他の遺構

本遺構は、検出状況等から、弥生時代の遺構から外れると理解したものである。

(1) 土坑

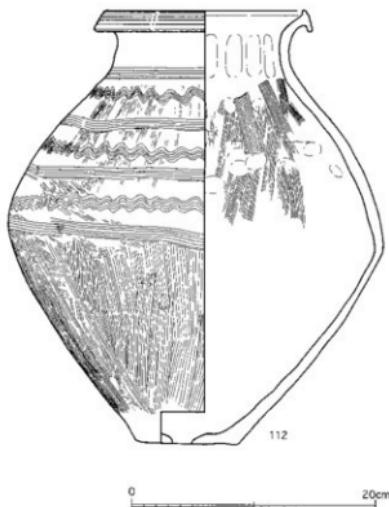
土坑 7 (図版13 写真図版10)

検出状況 A地区南側の平坦部で検出した。

形状・規模 南北軸0.7m、東西軸0.35mの隅丸長方形を呈する。

出土遺物 土坑内からは出土遺物は確認できなかった。

前調査区で検出された同様の方形土坑、及び確認調査の結果では、火葬墓若しくは土壙墓といった認識が有力である。もし、そうであれば時期的には中世の遺構として認識して差し支えなかろう。



第5図 土器埋設土坑 7 出土土器

第3章 有鼻遺跡の出土遺物

第1節 土器

(1) 概要

有鼻遺跡出土の土器は、遺構出土の土器が非常に僅少であり、包含層出土の土器がその多くを占めている。特にA地区出土の土器群は、遺構付近の出土でありながら、遺構との混在から若干取り扱いが煩雑になってしまった現状にある。それは偏に整理と編集を担当した職員の責任に他ならないが、土器の解説まで煩雑になるのを避けるため、一覧表の掲載によるものに重きを置くこととする。

なお、弥生土器の分類について、『有鼻遺跡(1)』における岸岡氏の分類に準拠するので、参照されたい。また、氏の分類に記載のないものについては、随時解説を加える事とする。

(2) A地区包含層出土土器 (図版17~20 写真図版17~22・30・31)

壺 (6~22)

6・7・11は広口壺Dである。8は広口壺Aである。9は比較的広口壺Dに近い。10は広口壺C b のやや大振りのものである。12も広口壺C b に類似するものであろう。13は広口短頸壺A、14は広口短頸壺Bであり、16は広口短頸壺Bの系統でも古てのものと考えられる。15は細分が困難だが広口壺の範疇に納まるものである。17・18は其々壺の胴上部にあたるもので、退化簾状文が施されている。

19は受口壺Bであろう。20・21は直口壺Bの範疇と考えられ、21は一方に把手が付く。22は脚を有するかどうかは不明ながら、無頸壺Dである。

底部 (23・24)

壺・甕等の器種の別は明確でないが比較的大型のものである。

甕 (25~32)

25~32は、恐らく広義で甕Aの範疇にはいるものと考えられるが、29・30等のように「く」の字状口縁の屈曲がきついものは、或いは鉢Aの可能性も考えられる。

高杯 (33~37)

33は口縁部内側を巡る断面三角形凸帯の突出が比較的小さいが、高杯C c に近い。34は高杯C a 1 であろう。35は断面逆台形状凸帯の突出が比較的大きいが、高杯C b に近い。36・37は、口縁部の外反度や口縁端部の肥厚度に若干の違和感を感じるが、高杯B d の範疇に入るであろう。

脚類 (38~49)

38~41は、高杯の脚である。特に、41は杯部の底に焼成後穿孔を施したものである。

42は小型の壺か椀状の杯の台状部にあたると考えられるが明確でない。43~46は、台付き鉢或いは脚付き無頸壺になるものと考えられる。47~49は、恐らく無頸壺或いは水差し等の直口壺の何れも小型のものの脚と考えられる。

蓋 (50)

50は突出するつまみをもつ笠形の蓋である。焼成いは無頸壺に付くものであろう。

有孔円盤 (51)

51は甕・壺の胴部片を加工した円盤である。中央に円形の小孔を穿つ。

器台 (52~56)

52は岸岡氏の分類基準によれば器台B2となり、また53~56は大型器種の器台Aとなる。ただ、特に大型器台においては、大きく外反して口縁部を加飾するタイプと加飾しないタイプに分類される事から、53の受け部の状況で更に細分が可能である。

(3) A地区遺構出土土器 (図版21 写真図版23・24・32)

遺構出土の土器は、非常に少量である。特に、図化可能なものは希少である。

堅穴住居64 (57)

57は壺の底部と考えられる。堅穴住居64出土として上げられる土器は1点のみであるが、A地区包含層内の土器に、共伴するものもあるはずである。しかし、残念ながらその抽出にはいたらなかった。

堅穴住居71 (65)

65は外内面調整の状況から、敢えて脚とした。

堅穴住居72 (58~64)

58は広口壺C b、59は広口短頸壺か。60は小型の高杯と考えたが不明である。61は直口壺Bである。62は小型の台付き鉢、或いは小型壺の脚であろう。63は台付き鉢の脚である。64は、口縁部から体部にかけての外面に、簾状文を模した様な刺突列点文を施す。体部中位に小孔が2ヶ所見受けられる。内面は指頭圧痕が目立ち、調整が粗い。今回の出土遺物の中でも非常に異色のものである。器種は恐らく蓋であろう。

P 1 (66~70)

66は広口壺C b、67は広口短頸壺Aであろう。68~70は底部である。

P 2 (71)

71は底部である。

溝1 (72~77)

72は広口壺Bである。73は受口壺Bであり、頸部には指頭圧痕凸帯文が剥離したと思われる痕跡が残る。74は甕A、75は甕Bである。76は大型器種の底部である。77は器台の脚部である。

土器埋設土坑8 (78)

78は上半部が欠損しているが、甕であろう。

(4) B地区包含層出土土器 (図版22・23 写真図版25~27・33)

壺 (79~89)

79は広口壺C bである。80・81は広口壺Bであろう。82は広口壺C bのやや大型の器種になるのではなかろうか。83は広口短頸壺Aである。

84は把手付きの直口壺Bである。

85・86は壺の上半部である。85は櫛描き直線文と列点文を交互に配している。また、86は櫛描き斜格子文と直線文を施している。

87・88はミニチュア土器に類するものか。小さく外反する形態をもつ87は、広口壺Eに類似する。また、一見鉢Bに近い形態をもつ88は、口縁部形態等も考慮して、無頸壺の範疇に入れておく。

89は脚が付くかは不明だが、無類壺であろう。

90は台付き鉢の脚である。

91は壺の底部である。

92は壺Aであろう。

93は口縁端部が肥厚するタイプだが、全体のプロポーションから高杯Aに類するものと考えられる。

94・95・97は高杯の脚である。また、96は脚付き無類壺の脚であり、98・99はミニチュア土器であろう。

100 は突出するつまみをもつ笠形の蓋であり、101 は恐らく蓑笠形の蓋である。

(5) B地区遺構出土土器 (図版23 写真図版27・33)

竪穴住居74 (102 ~ 106)

102は口縁端部のみだが、恐らく広口壺Aである。103 は広口短頸壺に類するものと考える。104は高杯の脚であろう。105・106は壺の底部と考えられる。

土坑7 (107)

107 は底部である。

(6) C地区包含層出土土器 (図版23 写真図版28)

壺 (108)

108 は壺Aである。

底部 (109)

109は小型の壺の底部であろうか。底部中央には、焼成後穿孔を施す。

脚 (110・111)

110はミニチュア土器である。111は高杯である。

表1 出土弥生土器観察表

番号	基 標	器種・部位	器 形	口 径	深 度	底 形	施 工	外觀色調	内面色調	附 付	説 明
1	名古屋 磐	広口壺A	—	(19.0)	—	—	口縁2/3	黒	10YR7/3	10YR7/3	1m以下の砂粒を含む 外一凹面文2条。円錐形文 内へラ形状による斜斜判定
2	名古屋 磐	広山形壺A	—	(3.2)	—	—	口縁1/4	黒	10YR8/4	10YR8/4	1m前後の砂粒(石英・長石類)やや多く 含む(赤クサリ摸じる) 外一ハケテヨコナデ。側面に斜斜文。口縁部 に円形文。 内一口縁端間に2個メタ母貝の円孔。
3	包含器 壺	壺	—	—	(4.2)	—	ツマミ 1/2肩	黒	10YR7/3	10YR6/1	1m以下の中粒を含む 外一底底より不明 内一ヨコナデ。振押え。シボリ痕ある。
4	包含器 壺	高杯(脚)	(11.0)	—	—	(8.5)	脚部1/3	黒	7.5YR7/4	7.5YR7/4	1m以下の砂粒を含む 外一底底より不明 内一ハラケツリ。シボリ痕ある。
5	包含器 壺	器合A	(20.0)	(43.6)	—	—	受~脚 1/2	黒	7.5YR 7/4~5/5	7.5YR 7/4~5/5	石英、長石含む 外一側面ハケテヨコナデ。側面に斜斜2条。 側面に円孔とヘラ模様文。受部に斜斜文+斜 角文+円形文。 内一ハナメヨコナデ。
6	A地区包含器	広口壺D	—	(18.6)	—	—	口縁1/4	黒	7.5YR 7/4~7/6	7.5YR 7/4~7/6	石英、長石含む 外一側面ハケテヨコナデ。口縁部ゴコナ デ。波状文。 内一ハバメーナデ。波状正直。
7	A地区包含器	広口壺D	—	(33.0)	—	—	口縁1/3	不真	2.5YR8/4	2.5YR 8/3~9/3	1m以下の砂粒を少し含む 外一斜底。口縁部ゴコナデ。 内一豊底。波状正直。
8	A地区包含器	広口壺A	—	(28.0)	—	—	口縁1/4	不真	10YR1/6	10YR7/4	4m以下の砂粒を多く含む 外一豊底。口縁部円形文。器底回数2条。 内一豊底。
9	A地区包含器	広口壺D	—	(19.6)	—	—	口縁1/2	黒	10YR 8/2~7/3	10YR 8/3~7/3	1m以下の砂粒を少しあむ 外一側面ハケメーハラ形状工具の斜突文。 側面斜線4条。 内一ヨコナデ。
10	A地区包含器	広口壺C	—	(25.0)	—	—	口縁1/5	黒	7.5YR 7/1~7/6	7.5YR8/4	1m以下の砂粒を少し含む 外一側面ハケメーハラ形状。器底3条。口縁部 回数4条+円形文6条。 内一ヨコナデ。
11	A地区包含器	広口壺D	—	(23.0)	—	—	口縁1/4	黒	10YR7/4	10YR7/3	0.5mm前後の砂粒を少し含む 外一側面ヨコナデ+波状文+直底文。口縁部 波状文。 内一ヨコナデ(ガキを近い)。
12	A地区包含器	広口壺C	—	19.1	—	—	口縁3/4	黒	SYR6/6	SYR8/6	1mの砂粒を含む 外一側面斜線2条。口縁部→斜線4条→円形文 の順にヘラ形状工具の斜突文。2脚1対、1脚1 対の円孔を各2つ。持待つ。 内一ハバメーナデ。波状文。
13	A地区包含器	広山形壺A	—	19.4	—	—	口縁3/4	黒	10YR 8/4~6/2	10YR 8/2~5/1	1m以下の砂粒を少し含む 外一側面直底文+横伏文。口縁部ゴコナデ。 内一輪郭ハケメ。口縁部ゴミガキ。斜斜判定文。
14	A地区包含器	広口壺B	—	(18.2)	—	—	口縁1/5	黒	10YR7/4	10YR7/4	0.5~1.5mmの砂粒(石英・長石・チャート等) を含む 外一側面ハケメーハラ形状+直底文。口縁部に 斜線2~3条。直底文+波状浮萍。 内一ハバメーナデ。口縁部に直底文。
15	A地区包含器	広口壺	—	(16.7)	—	—	口縁1/5	黒	7.5YR1/6	7.5YR2/6	1m以下の砂粒を少し含む 外一ヨコナデ。 内一豊底。口縁部に扇形文3段。
16	A地区包含器	広口壺B	—	(18.9)	—	—	口縁1/4	黒	2.5YR6/3	2.5YR6/3	直底文 外一側面直底文。口縁部ゴコナデ+波状文。 内一輪郭ハナメ。口縁部ゴミガキ。斜斜判定文。
17	A地区包含器	壺	—	—	—	—	横斜通片	黒	10YR6/6	10YR6/1	豊母含む。 外一豊底文2条。
18	A地区包含器	壺	—	—	—	—	脚部破片	黒	7.5YR 7/4~6/4	10YR7/4	1m以下の砂粒を少し含む 外一豊底文2条。
19	A地区包含器	受口壺B	—	(17.5)	—	—	口縁1/3	黒	SYR6/8	SYR6/8 7.5YR7/6	2mm前後の砂粒を多く含む 外一ハケメーヨコナデ。柄穴内丸文。 内一ハバメーヨコナデ。波状正直。
20	A地区包含器	受口壺B	—	(17.0)	—	—	口縁2/3	黒	7.5YR7/6	7.5YR7/6	1m以下の砂粒を少し含む 外一豊底。ヨコナデ。

番号	地 帯	岩種・鉱物	鉱 层	口 深	層 厚	底 面	残存 率	块 成	外見色調	内 色調	特 性	質 塩	
21	A地区岩食 層	高山英B (把手材)	-	-	(3.0)	-	1/5	良	10YR8/3 ~5YR7/6	2.5YR/2 1mm以下の砂粒を含む	外一ハケメノナデ。口縁部凹凸。 内一滑感。		
22	A地区岩食 層	無鉱巖D	-	(2.7)	0.1	-	白雲～灰 塵1/10	良	10YR 7/2-6/3	10YR 7/4-6/3	1mm前後の砂粒(石英砂)を含む	外一コナデ。凹凸感。 内一滑感。	
23	A地区岩食 層	透輝	-	-	-	(0.9)	底層1/2	良	10YR7/3~ 5YR8/3	10YR7/3~ 2.5YR6/3	1mm前後の砂粒(石英砂)を含む	外一ヘリカキ? 内一ハラケズリ?	
24	A地区岩食 層	透輝	-	-	-	(0.1)	底層1/2	良	10YR 7/2-3/1	10YR 7/4-4/1	1~2mm以下の砂粒を含む	外一ヘリカキ。 内一ハケメ・ナナダ。	
25	A地区岩食 層	透輝A	-	(2.6)	(27.0)	-	口縁～軽 塵1/6	良	10YR8/4~ SYR6/4	10YR8/4 1mm以下の砂粒を含む	外一ハケメ・内タカキ。口縁部にサザン。 内一滑感。		
26	A地区岩食 層	透輝A	-	0.8.0	0.8.0	-	口縁～軽 塵1/5	不良	10YR8/4 1mm以下の砂粒を含む	10YR8/4 1mm以下の砂粒を含む	外一ハケメ。口縁部ヨコナデ。 内一ハケメ・口縁部ヨコナデ。		
27	A地区岩食 層	透輝A	-	0.9.0	-	口縁1/2	良	3.5YR/4	2.5YR/4		外一ハケメ。口縁部ヨコナデ。 内一ハケメ・口縁部ヨコナデ。		
28	A地区岩食 層	透輝A	-	(2.0)	-	口縁1/5	不良	10YR8/3 1mm以下の砂粒を含む	2.5YR/3 1mm以下の砂粒を含む		外一ハケメ。口縁部ヨコナデ。 内一滑感。		
29	A地区岩食 層	透輝A・透輝A	-	(3.0)	(7.0)	口縁1/3	良	7.5YR8/6 1mm以下の砂粒を含む	7.5YR8/6 1mm以下の砂粒を含む		外一ハケメ。口縁部ヨコナデ。 内一ハケメ・口縁部ヨコナデ。		
30	A地区岩食 層	透輝A・透輝A	-	(2.5)	(6.0)	-	口縁1/18	良	10YR8/4 4/1-3/1	10YR8/4 ホタテ殻含む。	外一ハケメ。口縁部ヨコナデ。 内一滑感。口縁部ヨコナデ。		
31	A地区岩食 層	透輝A	-	(2.7)	-	-	口縁1/4	良	10YR 7/3-5/1	10YR 7/3-5/1	1mm以下の砂粒を含む	外一ハケメ。口縁部凹凸。 内一滑感。	
32	A地区岩食 層	透輝A	-	(3.7)	-	-	口縁1/7	良	7.5YR8/4 6/2-7/2	10YR 6/2-7/2	1mmの砂粒を多く含む	外一タカキ・ハメ。口縁部凹凸。 内一タカキ。口縁部ヨコナデ。	
33	A地区岩食 層	高輝C/C	-	2.5.0	-	-	口縁3/4	良	10YR8/3 1mm以下の砂粒を少しある	10YR8/3 1mm以下の砂粒を少しある	外一ゴコナデ。		
34	A地区岩食 層	高輝C/C	-	(3.3)	-	-	口縁1/4	良	10YR 6/4-5/2	7.5YR 6/4-6/6	1mm以下の砂粒を少しある	外一体部ヘリカキ。口縁部ヨコナデ。 内一体部タカキ。	
35	A地区岩食 層	高輝C/C	-	(3.4)	-	-	口縁1/4	良	10YR7/4 10YR7/4	10YR7/4 石英・長石を含む。	外一ゴコナデ。 内 ヨコナデ。		
36	A地区岩食 層	高輝E/d	-	(2.2)	-	口縁1/19	良	10YR8/4 1mm以下の砂粒を少しある	10YR8/4 1mm以下の砂粒を少しある	外一休部ヘリカキ。口縁部ヨコナデ。 内 休部ハケメヘリカキ。			
37	A地区岩食 層	高輝E/d	-	(2.0)	-	-	口縁1/4	良	10YR8/3 ~7/4	7.5YR7/4 ~6/2	1.5mmの砂粒を含む	外一ヘリカキ。口縁部ヨコナデ。凹凸。 内 ハリカキ。口縁部ヨコナデ。	
38	A地区岩食 層	高輝E/d	-	-	-	(5.4)	1/2	良	10YR8/3 1mm以下の砂粒を含む	10YR8/3 1mm以下の砂粒を含む	外一崩れヘリカキ。隙縫部ヨコナデ。ヘリカキ。 内 サザン。		
39	A地区岩食 層	高輝E/d	-	-	-	(2.7)	1/2	やや不良	10YR 6/3-7/4	2.5YR/3 1.5mm以下の砂粒を含む	外一滑感。くがき扱ふ。凹凸。 内一コナデ。シボリ感。		
40	A地区岩食 層	高輝E/d	-	-	-	(3.0)	1/2	良	7.5YR8/4 2.5YR/6		外一滑感。指おさえ。凹凸。 内一滑感。指おさえ。シボリ感。		
41	A地区岩食 層	高輝E/d	-	-	-	-	不良	10YR8/4 1mm以下の砂粒を含む	10YR7/4 1mm以下の砂粒を含む		外一滑感。くがき扱ふ。斜面に滑感。 内一滑感。		
42	A地区岩食 層	高輝E/d	-	-	-	(10.0)	1/3	良	5YR8/8 5mm以下の砂粒を多く含む	5YR8/8 5mm以下の砂粒を多く含む	外一滑感。		
43	A地区岩食 層	高輝E/d	-	-	-	(16.0)	剥離1/3	良	7.5YR 5.0-4/1	7.5YR/6 3mmの砂粒を少し含む	外一滑感。レボリ感		

番号	道 横	基準・部位	器	高	口 径	腹 部	成 熟	残 留	平 喫	前 或	外 面 色調	内面色調	熟	上	国 等
44	A地区包含層	腐敗	—	—	—	—	12.4	解剖2/3	良	10YR 6/4~6/1	10YR 6/4~6/1	1mm以下の砂粒を少し含む	外→ヘタミガキ。固縮部ヨコナヂ。	内→堅膜。レギリ斑。	
45	A地区包含層	腐敗(台村 含算)	—	—	—	—	14.3	1/2	良	5YR7/6	7.5YR7/4	2mm以下の砂粒を少混合	外→堅膜。	内→堅膜。シカリ斑。	
46	A地区包含層	腐敗(高野)	—	—	—	(13.5)	解剖1/3	良	7.5YR7/4	7.5YR7/4	2mm以下の砂粒を少混合	外→ヘタミガキ。固縮部ヨコナヂ。	内→ヘタケズリ・ナヂ。		
47	A地区包含層	腐敗	—	—	—	(9.8)	解剖1/8	良	10YR8/3	10YR8/1	石英を含む。	外→固縮部ヨコナヂ。ヘタガキス。円孔。	内→ナヂリ。		
48	A地区包含層	腐敗	—	—	—	—	9.4	1/2	良	10YR4/4~ 5YR7/6	10YR4/4~ 5YR7/6	2mmの砂粒を少し含む	外→堅膜。ヘラによる割れ文。円孔。圓隙。	内→堅膜。シカリ斑。	
49	A地区包含層	腐敗	—	—	—	(11.1)	解剖1/2	良	10YR 7/4~5/2	7.5YR7/4	1~2mmの砂粒を含む	外→堅膜。円孔。圓隙。	内→ヘタケズリ・縦縮ヨコナヂ。		
50	A地区包含層	腐	—	—	—	—	—	1/2	良	10YR6/2	7/3~8/1	1mmの砂粒を含む	外→ナヂ。舌状孔。	内→ハケヌ。U縫部ヨコナヂ。	
51	A地区包含層	土質石灰互層	—	(2.8)	—	—	中や火然	良	10YR 7/3~8/3	10YR 7/3~8/3	0.5mm以下の砂粒を含む				
52	A地区包含層	岩合B層	腐敗	—	—	6.7	10.5	9/10	良	2.5YR 6/5~7/5	2.5YR 6/3		外→ヨコナヂ。糞便5%。	内→剥膜。ケズリ・ナヂ。	
53	A地区包含層	岩合A層	腐敗	—	—	(28.4)	解剖1/4	良	10YR 6/5~7/6	10YR6/5~ 2.5YR7/8	1mmの砂粒を含む	外→ヨコナヂ。糞便6%。	内→ヨコナヂ。		
54	A地区包含層	岩合A層	腐敗	—	(36.0)	—	受取1/9	良	7.5YR 7/4~6/2	7.5YR 7/4~6/2	1mm以下の砂粒を少し含む	外→ヨコナヂ。糞便5%。円孔文。	内→ヨコナヂ。糞便4%付文。		
55	A地区包含層	岩合A層	腐敗	—	(31.0)	—	受取1/15	良	7.5YR6/6~ 8/5~7/5	7.5YR6/6~ 8/5~7/5	1mmの砂粒を少し含む	外→ハケヌ→ヨコナヂ。糞便2%。ナヂ1%。	内→剥膜。糞便文。		
56	A地区包含層	岩合A層	腐敗	—	(30.2)	—	—	受取1/9	良	7.5YR 8/5~7/6	7.5YR 8/5~7/6	赤サリ繩、チャット含む	外→ヨコナヂ。糞便3%+糞便文。	内→剥膜。糞便文。	
57	第6住居72	底板	—	—	—	3.5	蓮根のみ	良	7.5YR7/6~ 10YR4/2	10YR7/3	2mm以下の砂粒を少し含む	外→剥膜。	内→ハケヌ。		
58	第6住居72	底口蓋Cb	—	(13.0)	—	—	白鱗1/9	良	10YR1/4	10YR7/4		外→ハケヌ→ヨコナヂ。糞便5%。	内→剥膜。糞便文。		
59	第6住居72	底口蓋纏膜	—	(32.2)	—	—	口鱗1/5	良	10YR 6/4~6/2	10YR6/4	1mm以下の砂粒を少し含む	外→ヨコナヂ。糞便文。	内→西風。ヨコナヂ。糞便文。		
60	第6住居72	基杯?	—	(10.0)	—	—	口鱗1/10	良	10YR5/1	10YR5/1	石英を含む	外→ヨコナヂ。ヨコナヂ。	内→ヨコナヂ。		
61	第6住居72	重口蓋D	—	(13.2)	—	—	口鱗1/9	良	10YR 8/6~8/3	10YR8/4	2~3mmの砂粒を含む	外→剥膜。糞便2%。	内→剥膜。		
62	第6住居72	腐敗	—	—	—	(11.8)	解剖1/5	良	10YR6/5	10YR6/4	1.5mm以下の砂粒を含む	外→ヨコナヂ。ナザリ→門丸。	内→ヨコケメリ。		
63	第6住居72	糞合き糞膜 堆	—	—	—	(2.6)	1/2	良	2.5YR 5/1~7/4	2.5YR 5/1~7/4	1mm以下の砂粒を少し含む	外→堅膜。	内→ヨコナヂ。		
64	第6住居72	蓋?	—	(16.0)	—	—	1/2	良	2.5Y 5/1~8/3	2.5YR7/2	1mm以下の砂粒を少し含む	外→堅膜文。糞便5%付文。糞便。	内→ヨコナヂ。糞便5%。		
65	第6住居72	腐敗	—	—	—	(12.6)	解剖1/9	良	10YR3/1	10YR 6/2~4/2	1mm以下の砂粒を少し含む	外→ヨコナヂ。糞便2%。	内→ヨコナヂ。		
66	P 1	底口蓋Cb	—	(44.5)	—	—	口鱗1/2	やや良	7.5YR7/6	7.5YR8/4	2.5mm以下の砂粒を含む	外→堅膜。ヨコナヂ。糞便付文。	内→ヨコナヂ。糞便糞。		
67	P 1	底口蓋Cb A	—	(55.7)	—	—	口鱗1/9	不良	10YR6/4	10YR6/4	2mm以下の砂粒を少し含む	外→堅膜。糞便ナヂ。	内→西風。		

番号	道 構	基準・部位	基 高	口 径	深 度	流 量	残 究 率	地 或	外表面調	内面調	施 上		調 測
											左	右	
68	P 1	底部	—	—	—	(5.4)	底部1/4	良	10YR4/1	2.5YR7/2			外・磨滅。 内・磨滅。
69	P 1	底部	—	—	—	5.0	通路2/3	中・中小品	2.5YR3/1	2.5YR7/2	1mm以下の砂粒を少量含む		外・板ナゲ。 内・ナゲ。
70	P 1	底部	—	—	—	5.5	底部先端	良	2.5YR7/4	GYRS/0	2mm以上の砂粒を少量含む		外・磨滅。ハケナゲ。 内・磨滅。
71	P 1	底部	—	—	—	(7.4)	底部1/6	良	2.5YR3/1	GYR4/1	1mm以下の砂粒を少量含む		外・ナゲ・ミガキ。 内・磨滅。
72	第2	広口底部	—	(19.0)	—	—	口縁1/6	良	7.5YR	7.5YR			外・磨滅。ヨコナゲ。 内・磨滅。
73	第2	受口底部	—	(15.5)	—	—	口縁1/4	良	GYR6/8	GYR6/8			外・磨滅。内縮3%。凸筋剥離？ 内・磨滅。
74	第2	壁A	—	(17.8)	—	—	口縁1/6	良	10YR	10YR	1mmの砂粒を含む		外・ナゲ・メナード。ヨコナゲ。圓錐2箇。 内・ハケナ。ヨコナゲ。
75	第2	壁B	—	(18.0)	—	—	口縁1/1	良	10YR	10YR	8/4~5/3	7/3~5/2	外・磨滅。ヨコナゲ。 内・磨滅。ヨコナゲ。
76	第2	底部	—	—	—	8.0	底部先端	良	2.5YR6/6	GYR4/4~ 10YR4/4	1mmの砂粒を含む		外・ハラミガキ。 内・磨滅。質ナゲ？
77	溝2	谷合A 斜面	—	—	—	(9.0)	斜面1/9	良	7.5YR7/4	7.5YR7/6			外・ナゲ。斜面6%。 内・ヨコナゲ。
78	B斜面土坡 堤?	—	—	—	(9.3)	底部先端	良	10YR7/6	GYR4	1~2mm以下の砂粒を含む		外・磨滅。 内・磨滅。	
79	B地区低台 床	広口底部	—	14.1	—	—	口縁1/4	良	10YR4/4	10YR7/4	1mm以下の砂粒を少し含む		外・磨滅。ヨコナゲ。鉛紋4%。 内・磨滅。
80	B地区低台 床	広口底部	—	(6.0)	—	—	口縁1/4	良	7.5YR7/6	7.5YR7/6	石炭+チャート含む。		外・磨滅。ヨコナゲ。鉛紋3%。 内・ハケナ・ヨコナゲ。
81	B地区低台 床	広口底部	—	(6.0)	—	—	口縁1/3	不良	10YR7/3	10YR6/2	1.5mm以下の砂粒を少し含む		外・ハケナ。鉛紋4%。ヨコナゲ。田舎3%。 内・磨滅。ハケナ。
82	B地区低台 床	広口底部	—	(3.0)	—	—	口縁1/6	良	7.5YR4/4	7.5YR4/4			外・ハケナ。円錐3%。円形浮文。 内・ハケナ・ナゲ。
83	B地区低台 床 A	広口底部	—	(30.1)	—	—	口縁1/3	良	GYR7/6	GYR7/6	1mm以下の砂粒を少し含む		外・ハケナ。直線2%。ヨコナゲ。 内・磨滅。直形文。
84	B地区低台 床 B (砂利付)	直口底部 B	—	(30.0)	—	—	口縁1/5	良	10YR6/4	10YR6/4	1~3mmの砂粒を含む		外・磨滅。直線2%。 内・磨滅。押排き。
85	B地区低台 床	直口底部	—	—	—	—	刷毛片	良	GYR6/1	GYR6/4	1mmの砂粒を含む		外・直文。糸立文。 内・ハケナ。
86	B地区低台 床	直口底部	—	—	—	—	刷毛片	良	7.5YR7/6	7.5YR7/6	石炭+玄武岩を含む		外・直文。斜毛文。 内・ハケナ・ナゲ。
87	B地区低台 床	1.ニチュア 上層	7.5	44.0	0.70	0.04	口縁や 欠損	良	7.5YR	7.5YR	8/4~8/6	チャート+長石。	外・チャート+ハケナ・ナゲ。 内・ケギリ・ナゲ。無骨さん。
88	B地区低台 床	1.ニチュア 上層	6.2	8.0	8.7	4.4	光形	良	10YR4/4	10YR7/4	中・中粗。1mm以下の砂粒を少し含む		外・ナゲ。ヨコナゲ。無骨さん。 内・ケギリ。
89	B地区低台 床	脚付斜面 堤?	—	(17.5)	—	—	口縁1/9	良	7.5YR7/6	7.5YR7/6			外・ミガキ。ヨコナゲ。円錐5%。 内・ヨコナゲ。
90	B地区低台 床	合板斜面	—	—	—	(18.0)	斜面1/3	良	10YR6/4	10YR6/4	1mm以下の砂粒をやや多く含む		外・ナゲ・ヨコナゲ。
91	B地区低台 床	基部	—	—	—	(8.7)	底部先端	良	7.5YR	7.5YR7/6	1mm以下の砂粒を少し含む		外・ハラミガキ・ヨコナゲ。 内・壁ナゲ。

番号	地 域	基種・母粒	透 光	口 径	數 量	供 給	現 在	平 均	破 壊	外観色調	内観色調	植 土	河 流	
92	B地区包含層	盛A	(35.4)	—	—	口輪1/4	良	10YR4/1	7.5YR8/5	3mm以下の白色砂粒を少量含む	外一白滅。ヨコナデ。	内一ケメナデ。ヨコナデ。		
93	B地区包含層	高砂A	38.7	(18.7)	—	11.0	口輪1/4 脚部完存	良	2.5YR7/4	7.5YR7/4	3mm以下の砂粒を少量含む	外一部崩壊。ナギ。ヨコナデ。	内一ケメナデ。脚部シボリ風。	
94	B地区包含層	脚部(溝跡)	—	—	14.0	脚部完存	良	7.5YR7/6	7.5YR7/6		外一黒滅。1.ガキ・ヨコナデ。	内一ケズリ・根ナデ。シボリ風。		
95	B地区包含層	脚部(溝跡)	—	—	34.5	脚部1/4	良	5YR7/6~ 7.5YR8/6	7.5YR8/6	石英の砂粒を少量含む	外一1.ガキ・ヨコナデ。	内一ケズリ。シボリ風。		
96	B地区包含層	脚部(脚付 無脚部?)	—	—	34.1	脚部1/3	良	2.5YR6/6 7.5YR7/4	2.5YR6/6 7.5YR7/4		外一1.ガキ・ヨコナデ。斑縫2条。円孔。	内一ケズリ。		
97	B地区包含層	脚部(溝跡)	—	—	—	7.9	脚部完存	不良	10YR	10YR	1.5mm以下の砂粒を含む	外一1.ガキ・ヨコナデ。	内一ヨコナデ。シボリ風・後縫加厚。	
98	B地区包含層	脚部	—	—	—	8.0	脚部完存	良	10YR5/5 8/3~5/1	8/3~5/1	1mm以下の砂粒を少含む	外一ヨコナデ。	内一体縫ハゲタ。脚部シボリ風。	
99	B地区包含層	脚部	—	—	—	5.8	脚部完存	良	10YR7/4	10YR7/4	1mm以下の砂粒を少含む	外一黒滅。ヨコナデ。円孔。	内一黒滅。ヨコナデ。	
100	B地区包含層	盛	—	—	—	フマ1 2.6	1/8	良	7.5YR6/4	7.5YR6/4		外一黒滅。	内一黒滅。	
101	B地区包含層	盛	—	—	—	フマ1 6.7	1/8	良	10YR7/4	10YR7/4	2mm以下の砂粒を含む	外一1.ガ。	内一ナデ。	
102	蟹穴底層74	江戸塗A?	—	(30.4)	—	—	口輪 1/12	良	7.5YR6/4	7.5YR6/4	1mm以下の砂粒を含む	外一黒滅。ヨコナデ。	内一黒滅。ヨコナデ。後灰。	
103	蟹穴底層74	江戸塗B?	—	(12.6)	—	—	口輪1/8	不良	10YR7/4	10YR7/4	3mm以下の砂粒を少し含む	外一黒滅。ハケメ・ヨコナデ。斑縫2条。	内一黒滅。ハナナデ・ヨコナデ。	
104	蟹穴底層74	脚部(溝跡)	—	—	—	(31.9)	脚部1/8	不良	10YR8/4	10YR7/4	1.5mm以下の砂粒を少し含む	外一ヨコナデ。円孔。	内一ケズリ。	
105	蟹穴底層74	底55	—	—	—	(8.2)	脚部1/2	良	10YR7/4	10YR7/4	1mm以下の砂粒を少し含む	外一ハケメ・ヨコナデ。ナデ。	内一黒滅。	
106	蟹穴底層74	底55	—	—	—	(7.0)	脚部1/4	良	10YR7/4	10YR	1mmの砂粒を少し含む	外一ハミガキ。根押さえ。	内一黒滅。	
107	土被T	脚部	—	—	—	5.6	脚部完存	良	10YR	10YR	0.5mmの砂粒を少し含む	外一ハケメ・ナデ。	内一黒滅。	
108	C地区包含層	盛A	—	(38.4)	—	—	口輪1/5	不良	10YR8/4	3Y		外一黒滅。ハケメ・ヨコナデ。	内一ハケメ・ヨコナデ。脚部上端。	
109	C地区包含層	脚部	—	—	—	4.8	脚部完存	良	10YR	10YR	1~2mmの砂粒を含む	外一黒滅。	内一黒滅。根部中央に骨孔。	
110	C地区包含層	脚部	—	—	—	1.9	脚部完存	良	2.5Y4/1	10YR8/4	9.5mm以下の砂粒を少量含む	外一黒滅。1.ガキ・ヨコナデ。	内一黒滅。	
111	C地区包含層	脚部(底55)	—	—	—	14.6	脚部完存	良	10YR	10YR7/4~ 7/4~7/6	石英・赤サリ織の砂粒を少含む	外一1.ガキ・ヨコナデ。	内一消滅。ケズリ。	
112	十茶樹段土 底7	江戸塗D	35.7	16.1	30.0	8.5	光形	良	10YR7/4	10YR7/4		外一ハケメ。後灰文・底消文。斑縫4条。	内一ハケメ。根ナデ・ヨコナデ。根押さえ。	

第2節 石器(図版24 写真図版34~36)

1. 弥生時代の石器

(1) 概要と分類

今回の調査で出土した石器は、打製石鎌、磨製石鎌、磨製石剣、石錐、削器、楔形石器、二次加工のある剥片、磨製石斧、石庖丁、敲石・磨石、砥石、分割原石、剥片がある。ここでは、器種別に述べる。既に報告された分と併せて、内訳を表2に示した。石材鑑定については、サヌカイトに関しては、『有鼻(1)』鑑定結果(藻科 1999)を念頭に、報告者の肉眼観察により金山と二上山に分けた。岩屋産については、肉眼での区別が困難なため金山産に含まれることになる。磨製石器に関しては、先山徹氏(県立人と自然の博物館)に肉眼観察していただき、その結果を参考にして最終的な表記は報告者がおこなった。また分類に関しては、『有鼻遺跡(1)』の方針を踏襲した。

(2) 狩猟具・武器

打製石鎌(S1~17)

28点出土しており、そのうち17点を図化した。基部の形態で、1類(凹基無茎式)、2類(平基無茎式)、3類(突基無茎式:円基式)、4類(突基無茎式:尖基式)、5類(突基有茎式)に細分した。『有鼻(1)』と併せて、製品全体の中で47.5%を占める。内訳は(カッコ内は今回出土点数)、1類26点(2点)、2類51点(2点)、3類5点(2点)、4類55点(3点)、5類202点(14点)、分類不可能なもの81点(4点)である。以下、型式別に述べる。1類:(S 4)は、体部表面に階段状剥離を残す。縁辺をほぼ直線的に作り出すが、「く」の字形に若干外湾しつつ屈曲する。風化やや進む。2類:(S 5)は縁辺がわずかに外湾し、先端角が36度とやや鋭い切っ先を持つ。3類は今回の調査では該当するものは認められない。4類:(S 6)は平面木の葉形を呈し、基部付近に瘤状の隆起を残す。5類: 表2 器種別出土量

(S 7~9)は細身で肉厚かつ鋭い切っ先を有する。復元される先端角は約30~40度の範囲に収まる。今回の調査では、このタイプのものはいずれも二上山産の石材を用いている。(S 10,11,13,14)は、基部と作用部の境目が、やや突出気味に張り出す。(S 10)は基部端を欠き、作用部は切っ先の手前で「く」の字形にわずかに屈曲しており、先端部を再生した可能性がある。(S 11,14)は表裏に一次剥離面を残しており、加工は線刃だけにとどまる。(S 13)は全体に粗雑な作りで、先端は円みを帯びてやや強く外湾する。(S 12)は小型品で先端部を欠失している。質の悪い石材を用いる。(S 15)は茎部を比較的丁寧に作り出す。先端から1/3を欠損しているが、欠損後作用部を再生している。しかし、瘤があるために切っ先をうまく作り出せておらず、実用品とは考えにくい。(S 16)は作用部と基部の境が下垂してわずかに突出する。(S 17)は茎部を比較的丁寧に作り出す。扁平な素材剥片を利用している。

器種	器種	有鼻1	有鼻2	絶対数	組成率
狩猟具・武器	打製石鎌	420	28	448	47.5%
	打製尖頭器	4	0	4	0.5%
	奥内式尖頭器	6	0	6	0.6%
工具	磨製石鎌	8	1	9	1.0%
	磨製石剣	3	1	4	0.4%
	石 縮	47	3	50	5.3%
工具	削 器	33	4	37	3.9%
	楔形石器	119	61	180	19.3%
	二次加工のある剥片	24	4	28	3.0%
農具	使用感のある剥片	26	0	26	2.8%
	磨製石斧	26	4	30	3.2%
	石 庵 丁	5	1	6	0.6%
加工具	大型直線刃石器	1	0	1	0.1%
	打製石斧	2	0	2	0.2%
	魚 労 鍬	石	1	0	0.1%
石核・石屑	敲 石・磨 石	28	2	30	3.2%
	砥 石	66	5	71	7.5%
	台 石	11	0	11	1.2%
	石 核	7	0	7	
	分割原石	11	1	12	
	剥 片	59	961	420	

磨製石鎌(S27)

凸基有茎式の鎌である。明瞭な鎌は持たず、縁辺を研いで刃をつけている。このため横断面形は扁平な6角形様を呈する。器面には研磨時の線条痕が顕著に認められる。細かい面単位が形成されていることから、運動方向やあたりの角度を微妙に変えて研磨作業を行ったことが伺われる。なお、B面の基部付近にはやや強い線条痕が認められる。

磨製石剣(S28)

鉄剣形石剣のものか。明瞭な鎌を作り出し、断面形は鎌からやや円みを帯びつつ刃縁へと至る。

(3) 工具

石錐(S18)

3点出土したうち1点を図化した。いずれも錐部と基部の境が明瞭である。剥片の突出部分を加工して利用しているものが1点みられる。

楔形石器(S19~24)

1つ以上の縁辺に、微細な階段状剥離の観察可能なものの、1類（方柱状を呈し、1辺あるいは2辺に階段状剥離を残すもの）と2類（縁辺に階段状剥離が認められ、それ以外のところに剪断面が観察されるもの）に細分した。1類：(S 22~24)は方形を呈し、向かい合う1組の縁辺に階段状剥離が認められる。(S 24)は風化が進んでおり、繩文時代に上る可能性もある。2類：(S 22~24)は三角形を呈し、階段状剥離を残す1縁辺と剪断面の2縁辺からなる。

二次加工のある石器

剥片の一部に加工の痕跡があり、連続的に施されていない点で、削器と区別する。6点出土しているが、図化はしていない。石材の内訳は金山産4点、二上山産2点である。

磨製石斧(S25,26)

大型始刃石斧1(S 26)、柱状片刃石斧2(S 25)、扁平片刃石斧1が出土した。図化したのは2点である。(S 25)は小型の柱状片刃石斧である。後主面中央部は、微妙に窪んだ面が形成されている。着柄の復元例を参考にすると、結わえる紐を巻き付ける箇所に相当し、使用時に生じる紐との摩擦により損耗したものと考えられる。刃部は後主面からみて左側が偏摩耗しており、刃縁には微小な剥離痕と主軸に平行する線条痕が観察される。基部端面は平坦に仕上げられているが、肩部分には刃先に向かう剥離面が認められ、使用時の衝撃によるものと推察される。また、端部にみられる剥離面は、後主面からみて左側に集中しており、刃部の偏摩耗との対応が指摘できる。(S 26)刃部偏約1/2を欠失。前後主面ともに平滑な面が形成されているため横断面形は俵形を呈する。この面には長軸方向に線条痕が発達する。一方側面は研磨が施されてはいるものの、特に肩部に顕著であるが、剥落し粗面を呈する箇所が多い。基部は幅狭で厚みもなく端面は長楕円形を呈する。基部の両面に刃部方向に向かう剥離面がみられるが、伐採斧の着柄例から使用によるものとは考えにくく、敲石として二次的に利用した可能性が高い。

(4) 農具

石磨丁(S 29)

端部の破片。直線刃半月形態に復元できる。体部には斜め方向に、刃部には横方向に、研磨時の線条痕がみられる。刃部は片刃で、刃をつけた逆の面の刃部縁辺では、使用による顕著な摩耗がみられる。

(5) 調理具・加工具

砥石(S30~32)

5点出土している。3点を図化した。(S30)は小型の砥石片。主面に複数の砥面が形成される。軟質で肌理の細かい砂～泥岩質の石材を用いる。(S31)は大型の砥石で中央部分はわずかに窪む。長軸方向に断面V字形を呈する強い線条痕が認められる。(S32)は粗粒の砂岩で脆弱な石材を用いている。作業面全体を砥面として利用する。

2. 繩文時代の石器(S1～3)

石器が3点出土している。(S1)は完形品。表裏に一次剥離面を残す。表面の一次剥離面の上端部は瘤状の隆起が残る。(S2)の縁辺は押圧剥離を施し丁寧に仕上げられている。(S3)は平面5角形を呈する。縁辺には細かな調整はみられない。

参考文献

葉科哲男 1999「有鼻遺跡出土のサヌカイト製造物の石材产地分析」『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書V-有鼻遺跡(1)』 兵庫県教育委員会

表3 出土石器法量表

石器

番号	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	地区	遺構	部位	石材・産地	類型	先端角	抉り長(mm)	抉り幅(mm)	茎長(mm)
1	24.9	15.2	3.8	1.1	A-北		谷部包含層上層	金山	2	45	5.6	7.7	
2	25.4	23.3	5.6	2.4	B-北		表拂	チャート	2	42	6	6	
3	18.2	15.0	3.8	0.7	A-北	房2	堆土	金山	1	100			
4	98.5	90.7	5.9	2.3	A-北		谷部包含層上層	金山	3	45	1.5	9.3	
5	29.0	15.6	4.5	1.4				金山	1	36			
6	39.8	17.0	5.5	2.3	A-北		谷部包含層	金山	4	77			
7	49.7	16.1	6.5	3.2				金山	5	36			
8	49.8	17.5	6.4	4.1				金山	5	29			
9	32.7	12.1	7.5	2.6	A-北		谷部包含層上層	二上山	5	39			
10	90.8	16.8	5.8	2.3				金山	5	53		3.5	
11	52.2	27.5	5.8	5.7				金山	5	39		7	
12	26.4	1.5	5.2	1.5				金山	5	38		7	
13	53.5	16.0	7.7	3.1	A-北	整穴住居72	壁土	二上山	5	44		8	
14	32.0	22.2	6.2	2.7				金山	5	46		5	
15	28.3	19.8	6.5	2.6	A-北		谷部包含層	金山	5	47		11.5	
16	36.0	24.0	4.5	3.8	A-北	整穴住居72	壁土	金山	5	51		-	
17	42.0	27.0	3.1	3.3				金山	5	39		9	
27	41.3	17.7	3.1	2.6	B-南			粘板岩	5	42			

石劍

番号	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	地区	遺構	石材
28	39.5	40.2	5	12.9	A-北	包含層	粘板岩

石錐

番号	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	地区	石材・産地	頭部長(mm)	頭部幅(mm)	頭部厚(mm)
18	28.2	11.0	4.9	1.6		金山	17.4	5.5	4.2

模形石器

番号	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	地区	遺構	層位	産地	類型
19	39	32.2	8.3	10	B-西	—	—	金山	B2V
22	39.5	50.1	9.8	16.7	B-東	表土(人入剥削)	二上山	B1	
20	32.8	27.7	9	5.3	B-東	表土除去中	金山	B2V	
23	38	24.5	10.6	12.4	A-北	谷部上層包含層	金山	B2P	
21	33.5	34.5	11.5	6.6	—	—	—	金山	B2V
24	28	23.6	5	3.7	A-南	—	—	金山	B1

磨製石斧

番号	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	地区	遺構	層位	石材	刃角
25	柱狀片刃石斧	88.9	21.6	28.5	119.5	2トレス	—	綠色片岩	73
26	大型盤狀石斧	92.1	60.9	37.6	303.5	A-北	堅穴住居64	輝绿岩	—

石包丁

番号	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	地区	遺構	層位	石材・産地	形態	穿孔數	穿孔方法	刃角
29	30.0	48.7	5.9	8.5	A-北	—	谷部包含層上層	鶴見岩	直線刃半月形態	—	—	60

砥石

番号	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	地区	遺構	層位	石材	砥面構成 表・裏・左・右	砥面數
30	65.9	97.5	29.8	164.4	B-東	堅穴住居76	埋土	砂泥岩	2 1 3 1 1	4
31	219.7	142.1	130.0	6580.0	B-東	堅穴住居76付近	埋土	凝灰岩	1	1
32	218.5	96.1	87.2	2960.0	A-北	包含層	—	砂岩	2 1 1 1	3

第3節 金属器

(1) 概要

有鼻遺跡出土の弥生時代の金属器は、前調査『有鼻遺跡(1)』では、板状鉄斧・鉄劍をはじめ13点を報告しているが、今回の調査では、実際に図化できたのはA地区の2点を数えるのみであった。

(2) A地区出土鉄器 (図版21、写真図版24)

堅穴住居64 (F 1・F 2)

今回の調査で出土した鉄器は全て堅穴住居64出土のものである。F 1・F 2共に偏平な板状であり、F 1は現存長3.0cm、幅2.9cm、厚さ0.3cmで、F 2は現存長4.5cm、幅2.2cm、厚さ0.4~0.7cmを測る。何れも破片であり用途不明である。出土した鉄製品は、前調査の同遺構出土の板状鉄斧を合わせて4点である。点数自体はそれ程多くないが、今回の調査で炉状遺構と思われる赤変部を有す馬蹄形土坑が2基確認されており、鉄器生産にかかる鋳造構との関係を全く無視はできないであろう。

第4章 風呂ヶ谷城の調査

第1節 概要

下井沢風呂ヶ谷城は、北に武庫川とその支流である内神川との合流付近に位置する下井沢城を見下ろし、東には城ヶ岡山頂に設けられた東野上城を遠望する位置にあって、三田盆地の北部を一望できる。

揖津と丹波の国境に近いこの辺りには、この他にも藍岡山城、穴口城中尾城、森本城、青野城、平方城、大原城、釜屋城、立石城など、武庫川とその支流に沿って多くの中世城館が分布している。また、これらの城館に関する南北朝時代から鎌倉時代にかけての民話・伝説が数多く残されており、城が繰り広げられた当時の様子を今に伝えている。風呂ヶ谷城における記録や伝承などは遺されていないが、「風呂ヶ谷」という地名の由来として、『昔この谷に湧いていたといわれる温泉を、白狐に誘われた地元の農民が見つけた。』と言う伝説がある。しかし、崖状の急峻な斜面に挟まれた狭い谷地形が地名の由来で、白狐伝説は「風呂」という地名に温泉を結びつけて、後世に作られた話だという見解もある。また、同様の地形である森本城付近にも「風呂ヶ谷」という地名が残るようである。

下井沢風呂ヶ谷城は、急峻な斜面に挟まれた細長い丘陵の尾根の稜線を3ヶ所で分断して、比較的小規模な曲輪を設けるといった構造である。

最も南側に位置する堀切（堀切4）から南に続いている丘陵は、既に宅地造成工事によって殆ど失われている。この地区については平成7年度に調査を行っているが、山城に直接関係する遺構は検出されていない。しかし、（堀切4）には土橋が設置されており、地形的にも尾根上の平坦地が広く、尾根筋を回り込んだ有鼻遺跡の南部には、室町時代中期頃と見られる中世墓群等が検出されているため、何らかの利用がなされていたものとみて間違いないであろう。

（堀切4）とその北側の堀切（堀切3）間の曲輪は、小規模な段差によって南北に分けられており、西側に2段の帯曲輪、（堀切4）に降りる尾根の道の西側に腰曲輪が設けられている。（堀切3）と最も北側に位置する堀切（堀切1）間の曲輪は、周囲を土塁で囲まれている。内郭は段差が無く平坦である。曲輪を囲む土塁は、南辺の規模が幅・高さ共に他の三辺に比べて大きく、北辺の中央部が逆台形に途切れている。この様に土塁が途切れた部分は、下井沢風呂ヶ谷城の南南東に位置する釜屋城でも、西辺と南辺の2ヶ所で確認されている。釜屋城の場合は、逆三角形状に途切れしており、土塁外側に盛り土をして出入り口としていたとみられる部分があるため、排水施設と考えられている。しかし、風呂ヶ谷城の場合は、地形的に他に出入り口が求めにくいこと、（堀切1）から上がりてくる道と直接つながっていることから、この土塁の途切れた部分は虎口といえる。この虎口から北へ伸びている道は、蛇行しながら降り、（堀切1）で遮断されている。（堀切1）の南側に平行して、曲輪のすぐ下から斜面の中程まで土塁が設けられ、さらにその南側に規模の小さい溝（堀切2）が掘られている。

（堀切1）の北側の曲輪は、他の曲輪と比べて広く、眺望も良い。小規模な段差で南北に分けられ、東に少なくとも2段の帯曲輪が設けられている。この曲輪から北へは、尾根の稜線上で少なくとも3段の曲輪を貫きながら道が降りていく。

第2節 遺構（図版15 写真図版13～15）

下井沢風呂ヶ谷城の調査は、造成工事に伴う影響範囲が、曲輪など山城本体にまでには及ばなかったが、設定した山城西側斜面では、堀切4条、土塁などの遺構を検出した。

堀切1

検出状況 堀切1は最も規模が大きな堀切で、自然地形を利用してこれを整形し、谷底付近にまで谷底付近にまで、堅堀状に伸びている。

形状・規模 断面はほぼU字形を呈し、肩部の幅は約4.8m、底の幅は約0.9m、北側肩部からの深さは約2.1mである。

堀切2

検出状況 堀切2は南側の細い稜線から堀切1の掘られている谷筋に至る斜面に、堀切1に平行する土塁を設け、土塁と南側の尾根に挟まれた部分を振りくぼめて堀となしている。

形状・規模 断面はほぼ逆台形を呈し、肩部の幅は約4.4m、底の幅は約0.9m、南側肩部からの深さは約1.4mである。

堀切3

検出状況 堀切1や堀切3のように堅堀状に斜面にまで延ばされていない。

形状・規模 断面は調査区内の部分が西側端部にあたるため、底部のレベルが一定でなく、山形をして不整形となっているが、調査区外の様子では、基本的にはU字形ないし逆台形を呈しているようである。肩部の幅は約4.2m、底の幅は約1.8m、北側肩部からの深さは約1.1mである。

堀切4

検出状況 堀切3は堀切から西側斜面に出ると、細い尾根の稜線を避けるように北側へ屈曲して、堅堀状になっている。

形状・規模 断面はU字形ないし逆台形を呈しており、肩部の幅は約3.5m、底の幅は約1.8m、北側肩部からの深さは約1.1mである。

土塁

検出状況 土塁は、西側斜面では堀切1の南側だけに築かれている。

形状・規模 断面は薄鉢形を呈している。断面の観察からは、明赤褐色粘質土を一度に盛り上げている様子が窺える。残存高は約0.8mで、堀切1の底のレベルとの比高は約2.4mである。

第3節 出土遺物

下井沢風呂ヶ谷城で出土した遺物は、山城築城当時のものは確認できなかった。

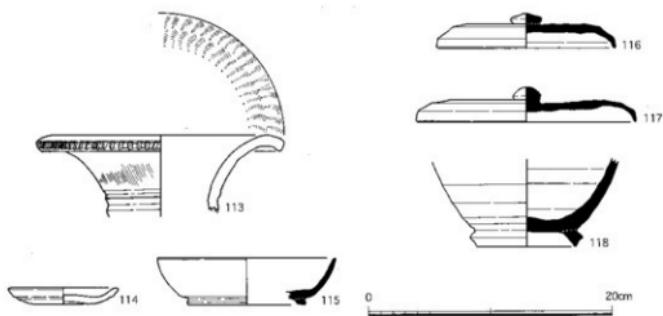
(1) 土器（第6図、写真図版29）

弥生土器（113）

113は広口壺Aであろう。外面は回線文2条、口縁端部にキザミを施す。内面は扇形文を施す。

土師器（114）

114は小皿である。底部付近は、若干上げ底気味となっているが、底部に糸切り痕が残る。中世のものである。



第6図 下井沢風呂ヶ谷城出土土器

須恵器 (115 ~118)

115は壺Bである。116・117は壺B蓋である。118は壺或いは短頸壺であろう。底部には高台を有する。

(2) 石器および石製品

削器 (S33)

包含層出土。横長の素材剥片を利用する。刃部は両面からの剥離調整で作り出し、刃角76度、刃部の長さ44mmを測る。背部側は片面からのみ調整を行っている。

不明石製品 (S34)

SD02の底から出土している。出土状況から弥生時代のものと判断されるが、管見では類例を知らない。粘板岩製。表面には製作時の研磨痕が観察される。全体はやや偏平な直方体で、各面は平坦ではなく、やや中心が盛り上がる。部分的に、縞を持たせているかのようではあるが、総じてみると明瞭ではなく、意図的な所作とは判じ難い。平面形をみると、一方の橋をやや細く作り出しておらず、あたかも剣の基部を想起させる。しかし、製作技術の点から、弥生時代の剣形石製品とは同列で捉えられないものである。

石仏

SD01出土。腕の表現などは精巧でない。

第5章 まとめ

第1節 有鼻遺跡出土の土器埋設土坑について

1. はじめに

今回の調査で出土した土器埋設土坑は2基のみであったが、前調査の成果を加えれば9基を数え、遺跡内に土器埋設土坑が散在することが分かった。弥生時代の集落において、特に中期にはこの様な遺構がしばしば確認され、從前から多くの場合土器棺墓と呼称し、死産児及び幼・小児の埋葬施設として位置付けることが多かった。しかし、土器内での人骨出土例が僅少であり、検出状況が良好でないものもあり、遺構の性格付けとしては非常に曖昧なものとなっている。

近年、土器埋設土坑については、これを集成し積極的に土器棺墓として評価する動き(1)や、また土器棺墓研究の立場から検出状況の細分を行い、明確な土器棺墓の抽出をはかる動き(2)があり、從来あまり重視されなかった遺構への明確な評価を行う方向性が窺われる。そこで、筆者は前調査で検出したものも含め、有鼻遺跡の土器埋設土坑における私見を述べたいと思う。

2. 使用される土器

埋設に使用される土器は、基本的には壺・甕類である。器種は、明確なものは広口壺3基と甕が2基で、他のものは胴部上半が削平されているので不明である。この内、焼成後穿孔を有する土器は4基あり、壺が多いように見えるが明確でなく、使用される土器には一見して特段の差異は認められない。

3. 集落内における土器埋設土坑の位置

遺跡内に点在する土器埋設土坑は、東向きと南西向きの大きな谷に挟まれた細い尾根に画された、南北尾根上の2ヶ所に大別され、更に北側尾根は北端の北向き斜面、南側尾根は平坦部から東と西の斜面にその分布が別れる。特に南側や北半部の平坦地から北東に延びる尾根上では竪穴住居及びピット・土坑群が密集する部分には一個体の検出もない。同様に、北側でも竪穴住居の分布が希薄になる部分で検出している。第7図は、有鼻遺跡における居住域の施設（竪穴住居・掘立柱建物等）を、単期遺構と継続期遺構（建替えや拡張等）の時期別で区分したものと土器埋設土坑の分布を重ねたものであるが、最も時期的に継続するA～C期の竪穴住居にも、近接して土器埋設土坑を検出している。

北摂の高地性集落として知られる三田市ナカリ与遺跡は、第IV様式の住居跡と土器埋設土坑が検出され、土器棺墓との解釈がなされている。藤井整氏によれば、このような「土器棺墓」が高地性集落の住居と住居の空間地に点在する形で検出されるが、土器棺墓だけで集合して墓域を形成する事がない。また、それが何れかの住居に帰属するという状況でもなく、有鼻遺跡においても同様の状況が見えるという(3)。さらに、藤井氏は、高地性集落における土器棺墓の問題について、それらが他の墓制を伴わずに單独で出土する事、平地集落における土器棺墓が家族墓として墓域の構成員の一端を担うのに対して、あり方が特異である事を上げて、土器棺墓の可能性は低いとしている。

しかし、有鼻遺跡については所謂高地性集落の範疇に入るかについて否定的な見解もあり、高地性集



第7図 土器埋設土坑と居住施設との位置関係

落の典型的なあり方を示しているかは不明な点がある。また、平地集落の中にあっても、近年の大規模開発により、土器埋設土坑が居住域に点在する様相を示すものがあり⁽⁴⁾、私論での分類でも提示している⁽⁵⁾。

4.まとめ

有鼻遺跡で検出されたような土器埋設土坑は、前述した様に土器棺墓として否定的な見解がある。これは、從前より土器棺墓として位置付けられている土器埋設土坑についても言えることだが、人骨等の出土例が非常に稀少であることにも、その一端がある。確かに、より実証的な見地に立てば、これら物証を持たないものについては、墓制としての位置付けは危険である。しかし、そういった土器埋設行為は、埋設方法や身と蓋の組み合わせ等において、特段の違いが見られないものが多いのも確かである。

さて、ここで有鼻遺跡の例をみると、現状では居住域の時期経過の中にはあって、特に堅穴住居との切り合い関係にあるものは無い。さらに、土器埋設土坑の検出される場所は、前述したように非常に限定されている。これは、単なる偶然では無いはずで、明らかに土器埋設に対する意識と考えられる。これには、既に削平されているとの見解もあるようが、そういう見解も実証性に欠けるといえる。

そこで、土器埋設土坑を土器棺墓であるとの前提に立てば、その分布は居住施設との一定の距離を保つて埋設されている。この距離は、居住施設の造営と土器埋設行為の時期的な差異にも反映されると考えるが、基本的には造構同志の重複は無い。しかも、ある程度埋設する場所も限定されており、集落の縁辺部（必ずしも居住域と隔離しない距離）に埋設する意識であったと想定される。調査区北端尾根上に1基のみ埋設される土器埋設土坑は、まさに集落の北端とも言うべき箇所に立地している。

結論から言えば、今回有鼻遺跡で検出した造構は、土器棺墓としても良いのではないか、と言うことである。居住域の中に墓があるとは異常だと批判もあるようが、土器棺墓との埋設方法等に見る共通点がある以上、墓制として肯定的な見地に立ちたい。無論、これまでに検出された土器埋設土坑が、全て墓であるとの極論は持っていない。ただ、当時高い死亡率であったうらう幼・小兒（それ以下）が、区画墓埋葬の構成員として選択される一方で、血縁的紐帶を構成する筈であった者が、居住域において一定の規制を以て埋葬されるという行為が遺骸全てでは無いにせよ、あったものと想定するのである。

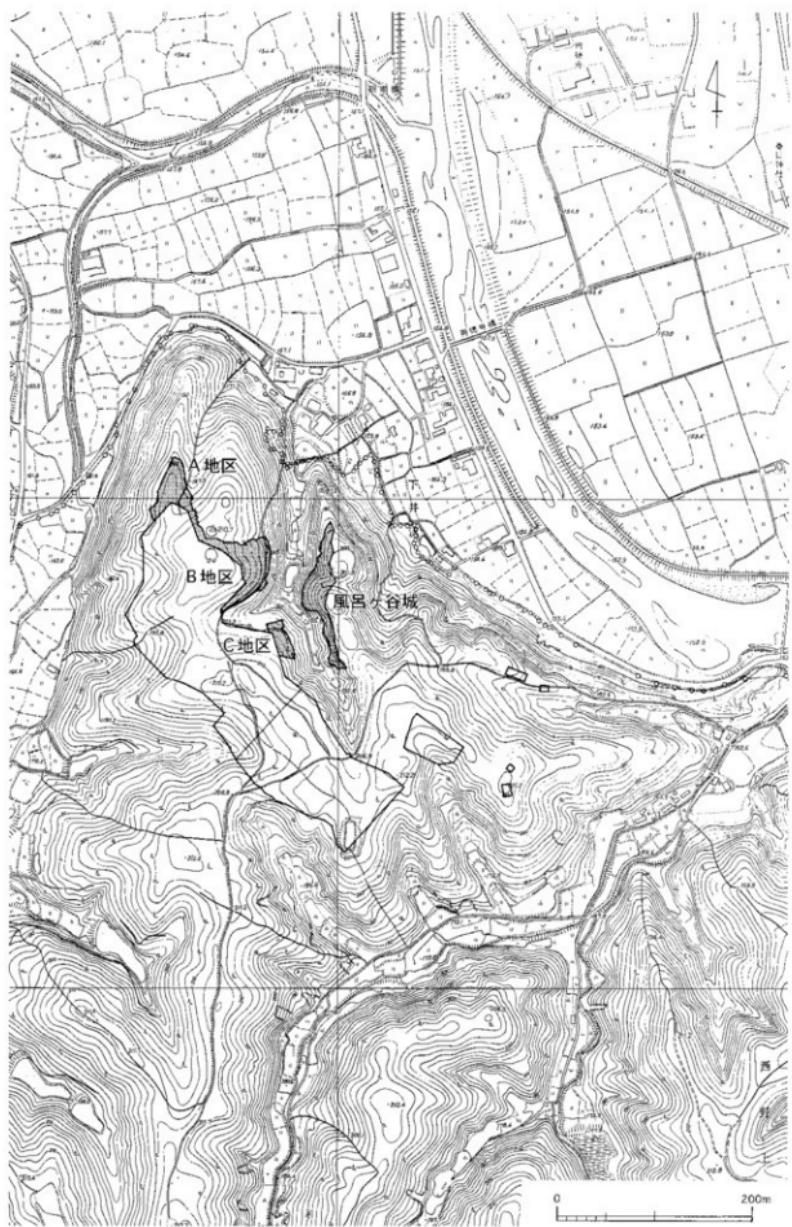
全てにおいて、実証にかける戲言に過ぎぬと言われば、真摯にご批判を仰ぐものである。また、今後より良好な遺骸の痕跡（人骨や脂肪酸分析例）が、得られることを切に願うものである。

最後に多忙な中、現場にて教示頂いた藤井整氏に感謝申し上げる。

註

- (1)角南聰一郎・山内基樹「兵庫県下の土器棺・土器棺墓」『播磨大中遺跡－はりま文化ゾーン総合整備構想に伴う第18次調査報告書－』播磨町教育委員会・奈良大学文学部考古学研究室1998
- (2)藤井整氏は、最近の研究テーマに土器棺墓の性格について再検討を行っている。
- (3)藤井整氏の御教示による。
- (4)兵庫県揖保郡太子町の亀田遺跡は、兵庫県教育委員会の調査で可能性のあるものを含めて、9基が調査されている。
- (5)深江英憲「弥生時代土器棺墓の研究－特に区画墓との係わりを中心とした一覧点－」『文化財学論集』所収 奈良大学 1994

図 版

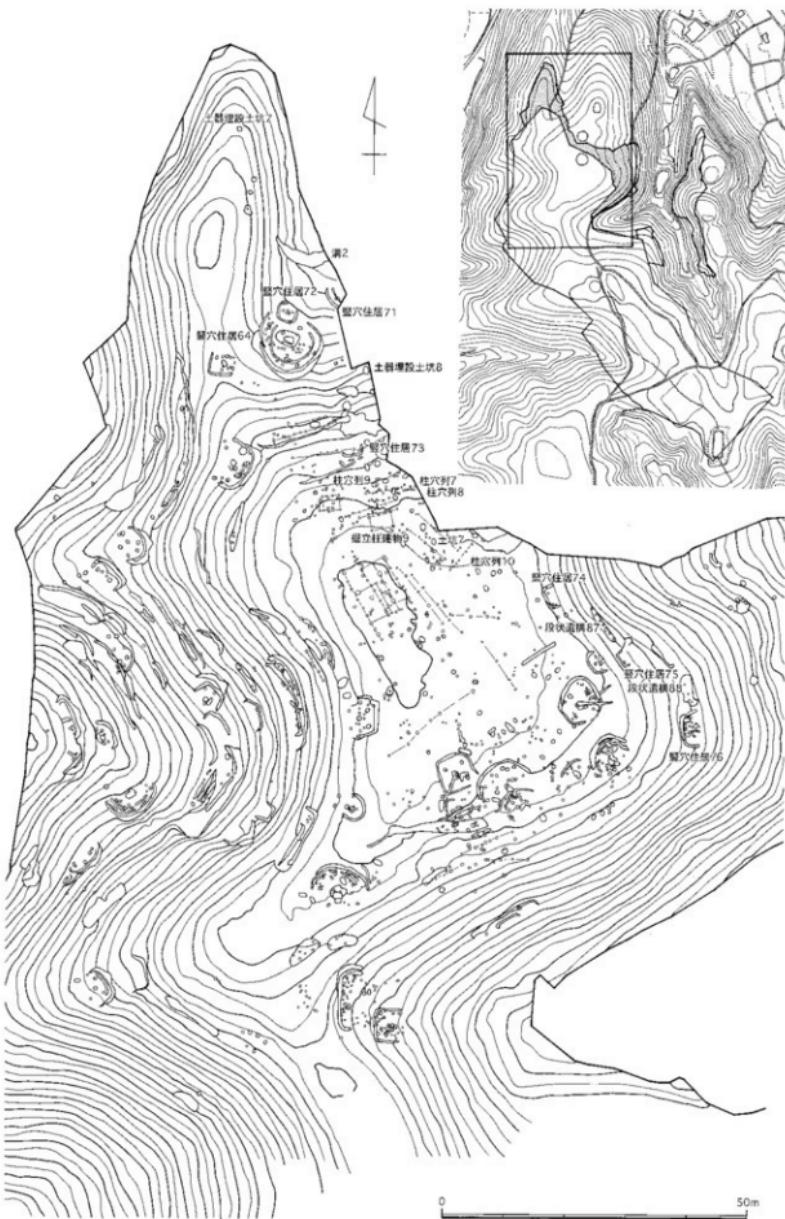


調査区位置図

図版2 造構



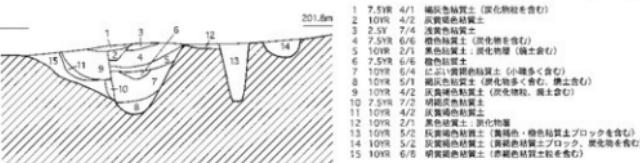
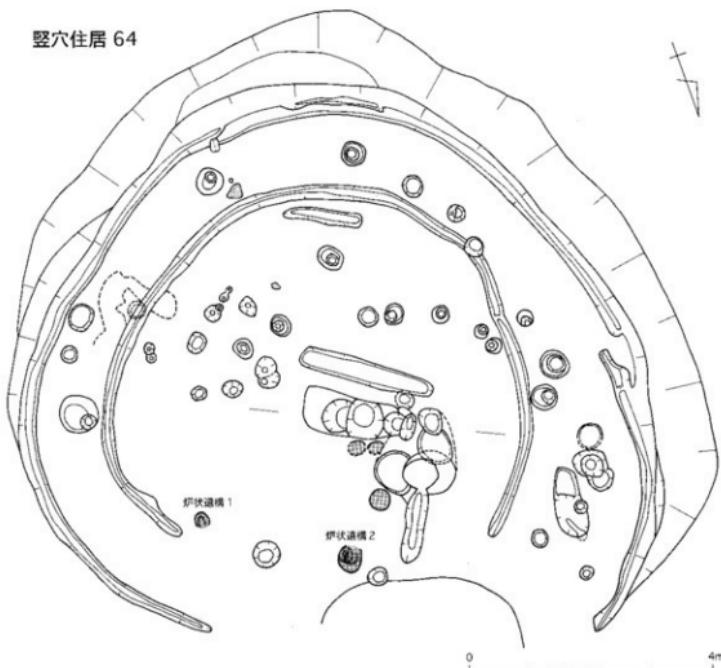
確認調査トレンチ位置図



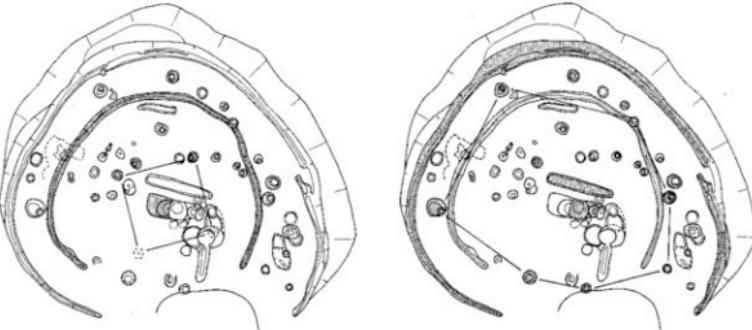
A地区・B地区遺構配置図（前調査区を含む）

図版4 造構

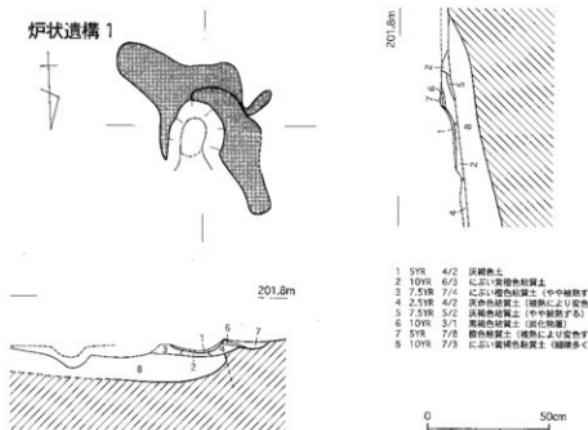
竪穴住居 64



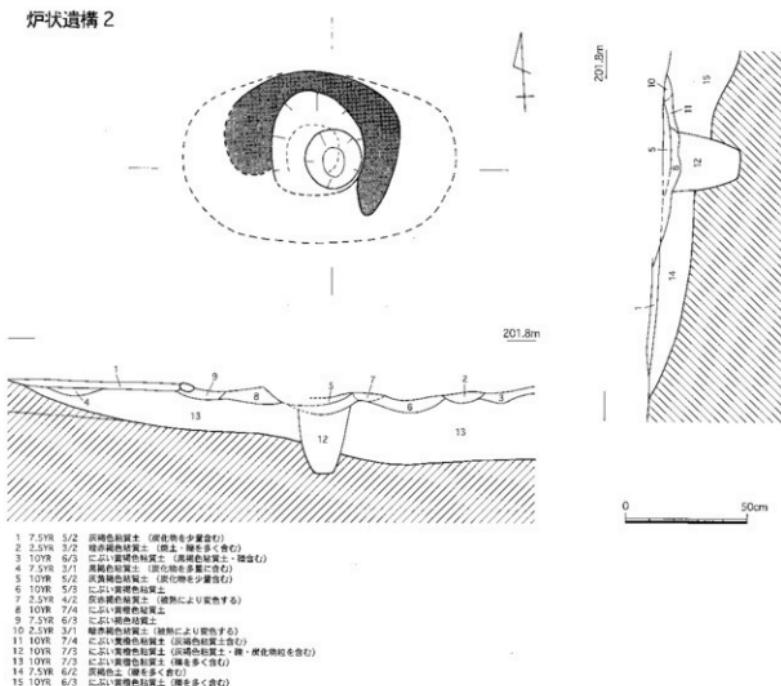
竪穴住居 64の変遷



炉状構造 1

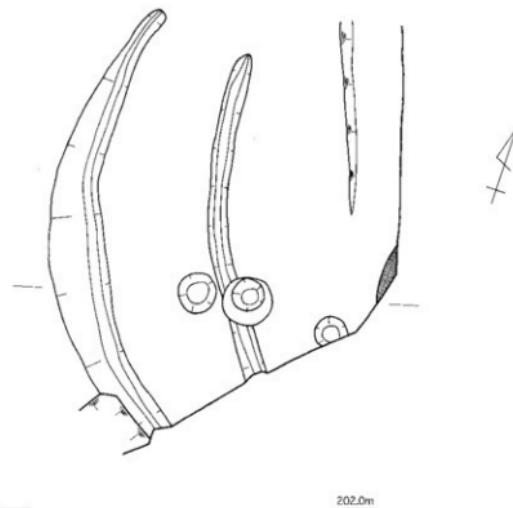


炉状構造 2

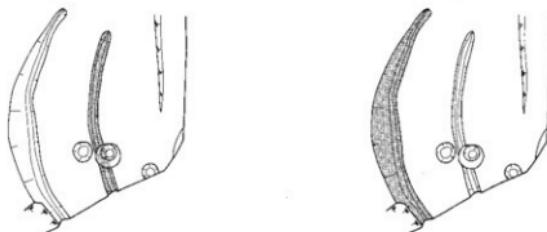


図版 6 造構

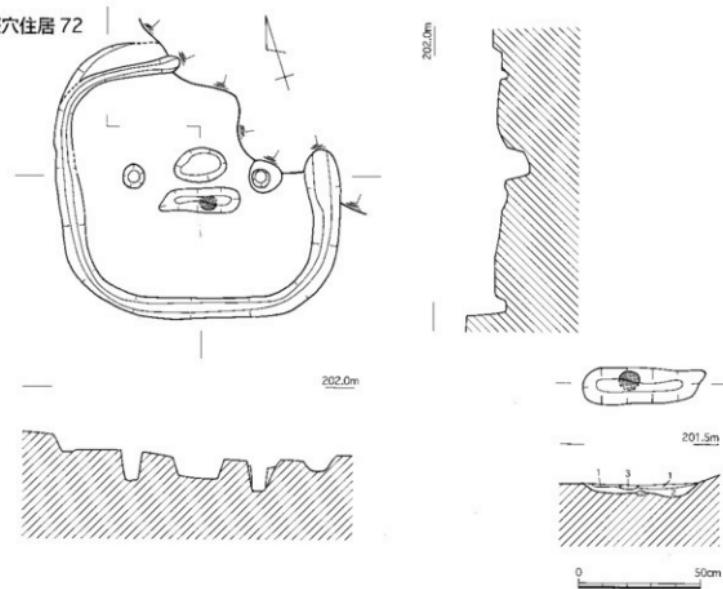
堅穴住居 71



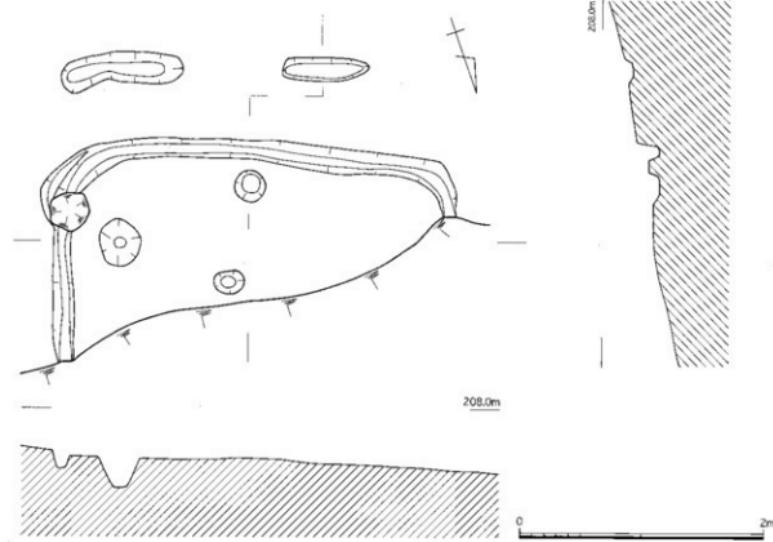
堅穴住居 71 の変遷



竪穴住居 72

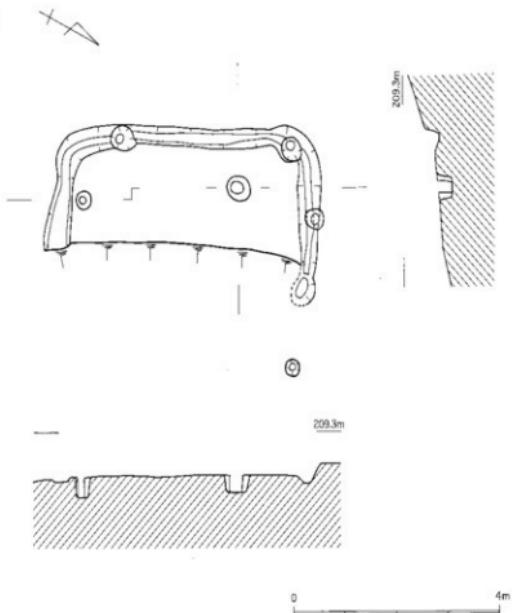


竪穴住居 73

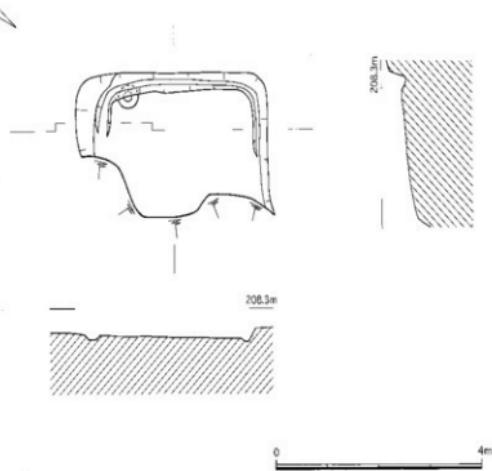


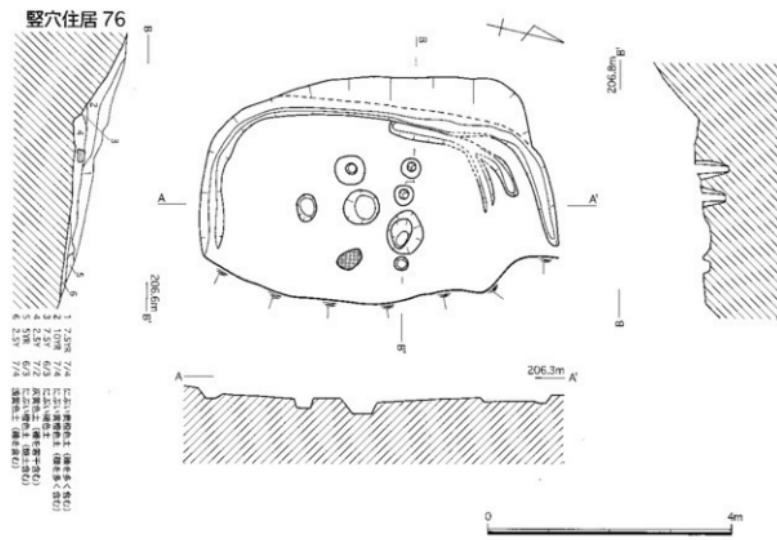
図版8 造構

竪穴住居 74



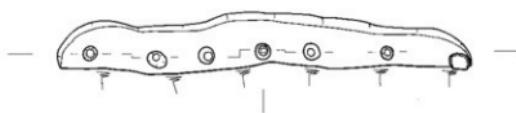
竪穴住居 75





図版10 造構

段状遺構 87



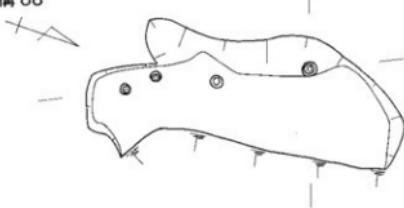
208.3m



208.3m

0 4m

段状遺構 88



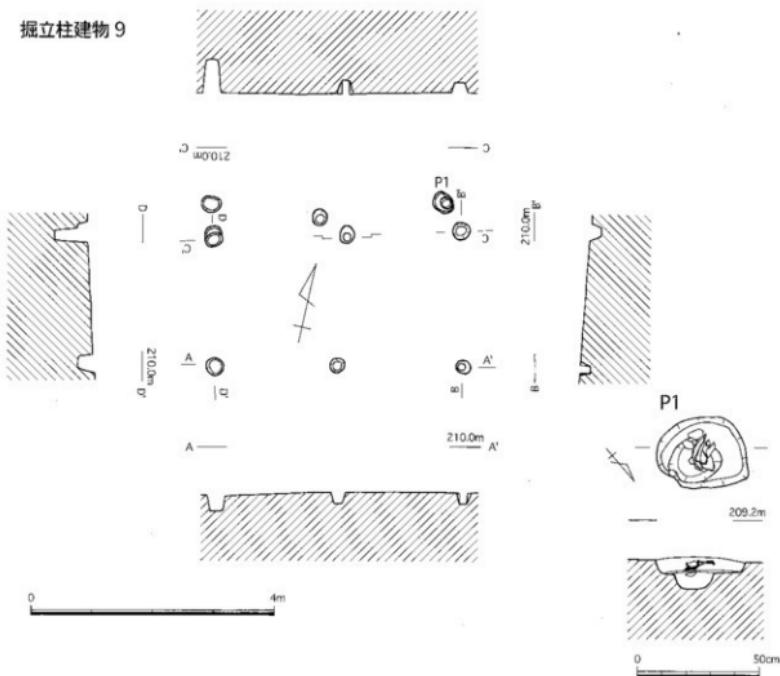
206.8m



205.9m

0 4m

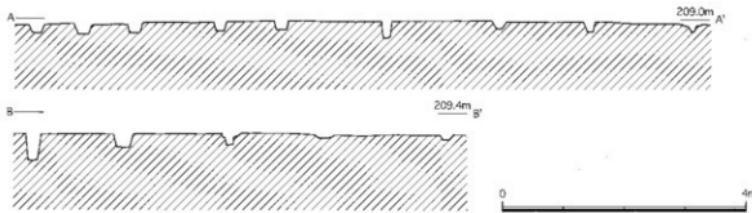
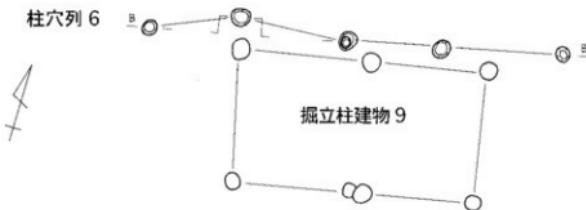
掘立柱建物 9



柱穴列 5



柱穴列 6



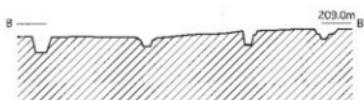
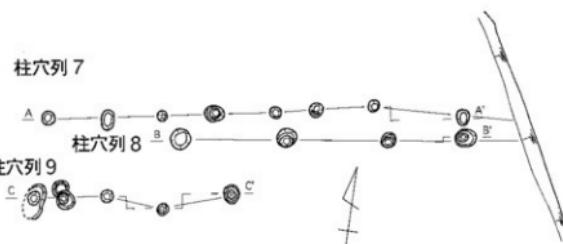
図版12 造構

柱穴列 7

柱穴列 8

柱穴列 9

柱穴列 10

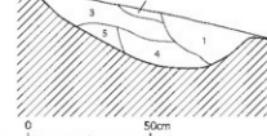
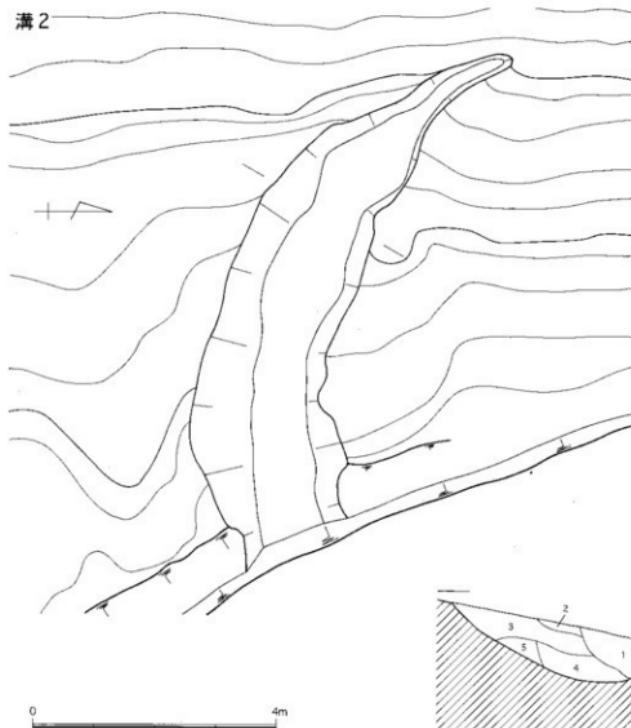


0 4m

柱穴列 10

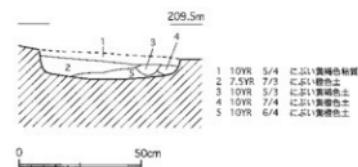
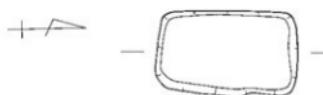


0 4m



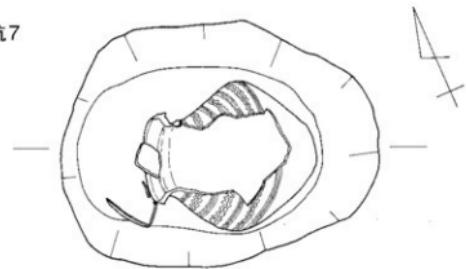
- 1 10YR 7/4 に少し黄褐色土(中層を含む)
 2 10YR 6/3 に少し黄褐色土
 3 10YR 5/2 深黄褐色土(少しある)
 4 10YR 5/3 に少し黄褐色土(に少し黄褐色、中層を含む)
 5 10YR 7/4 に少し黄褐色粘土土

土坑 7

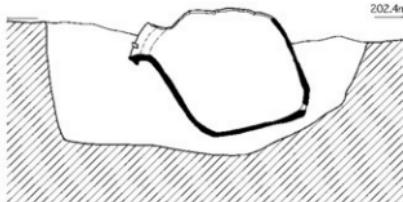


造構 図版14

土器埋設土坑7

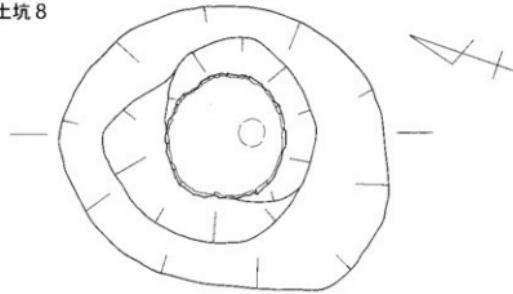


202.4m

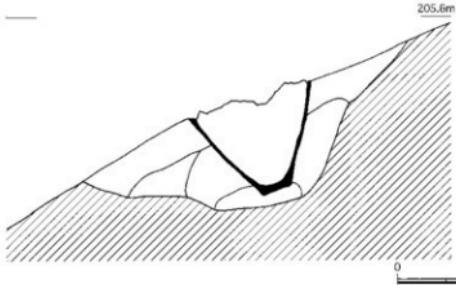


0 50cm

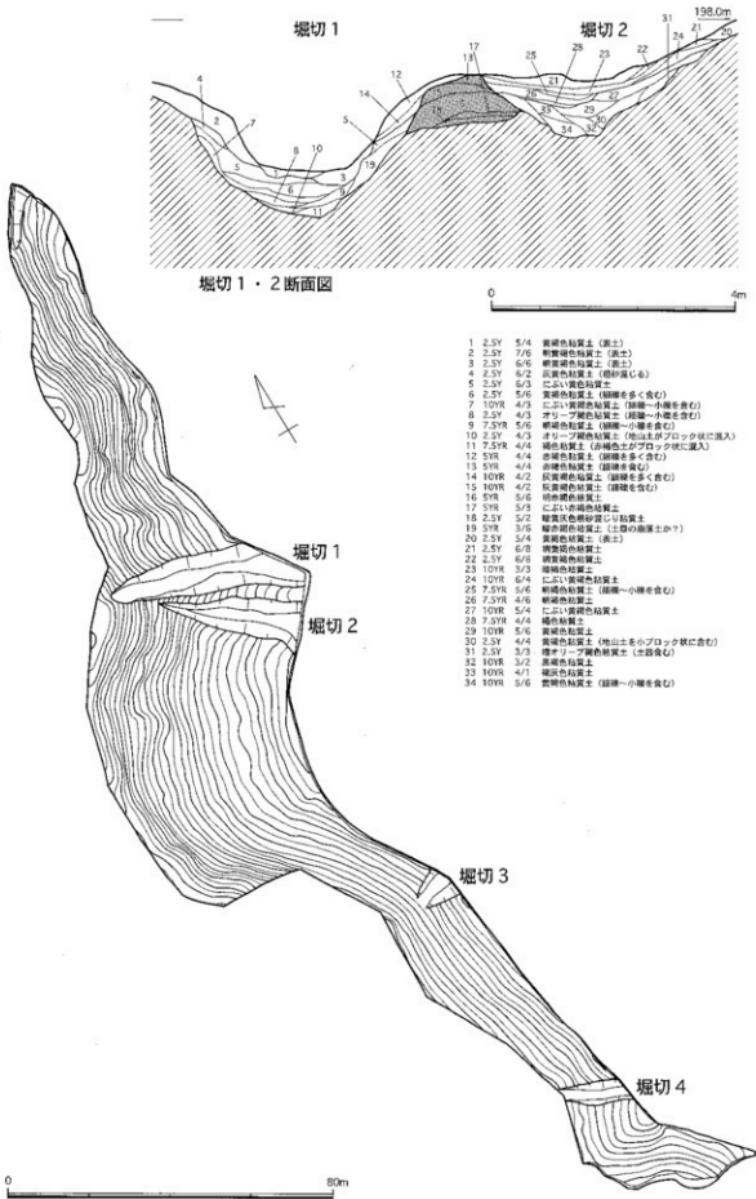
土器埋設土坑8

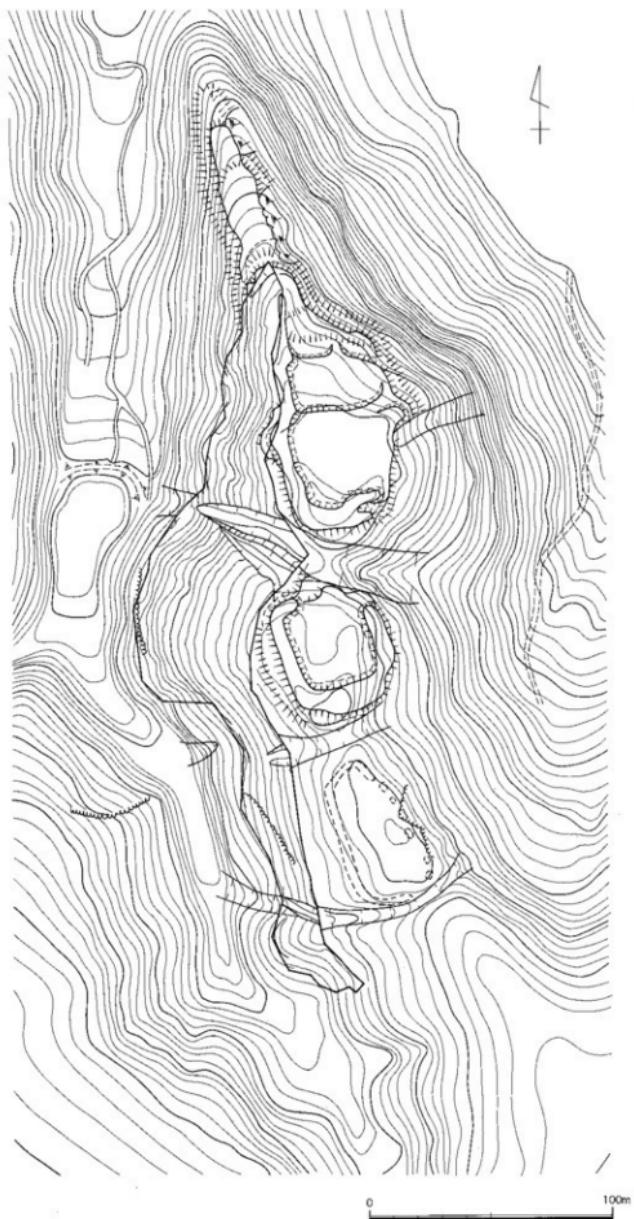


205.6m

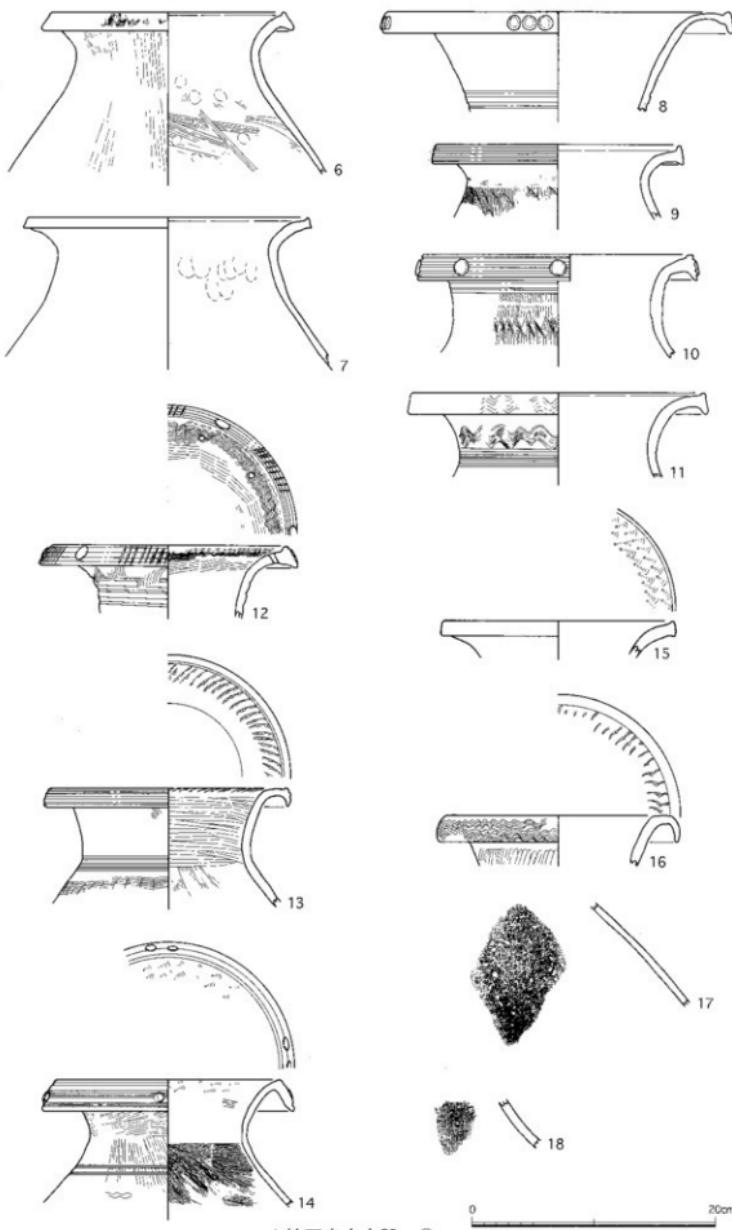


0 50cm

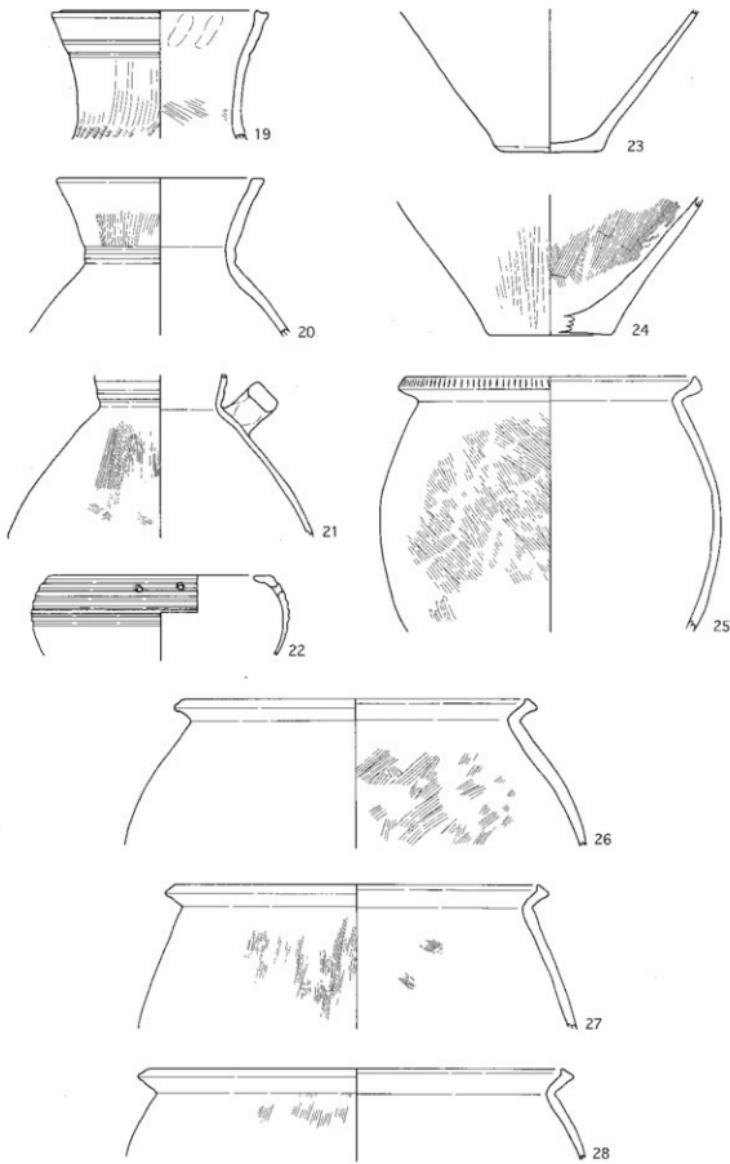




風呂ヶ谷城現況対応図

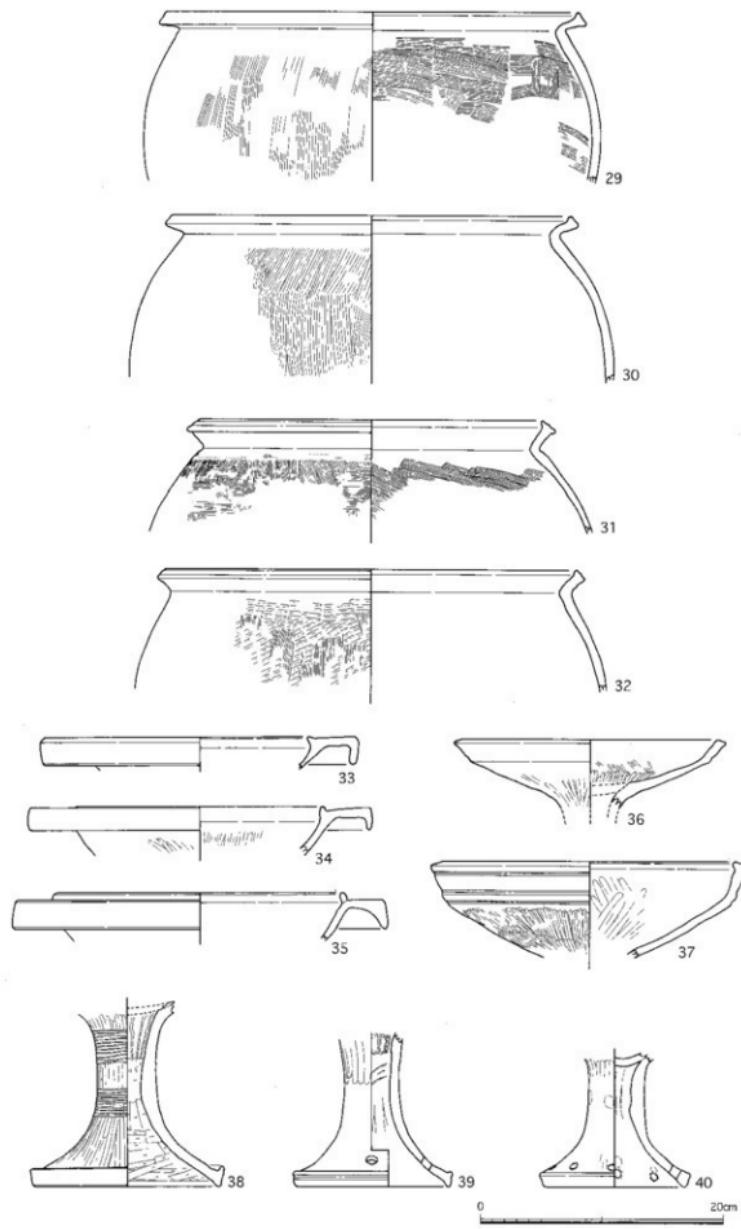


A地区出土土器 ①

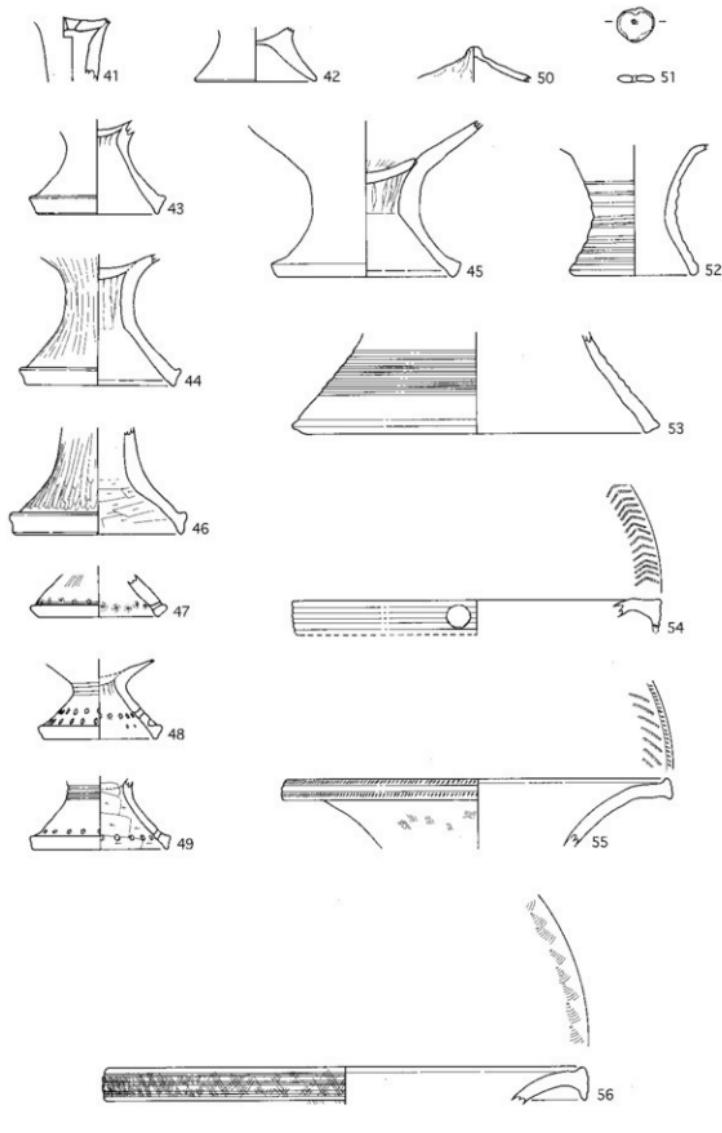


0 20cm

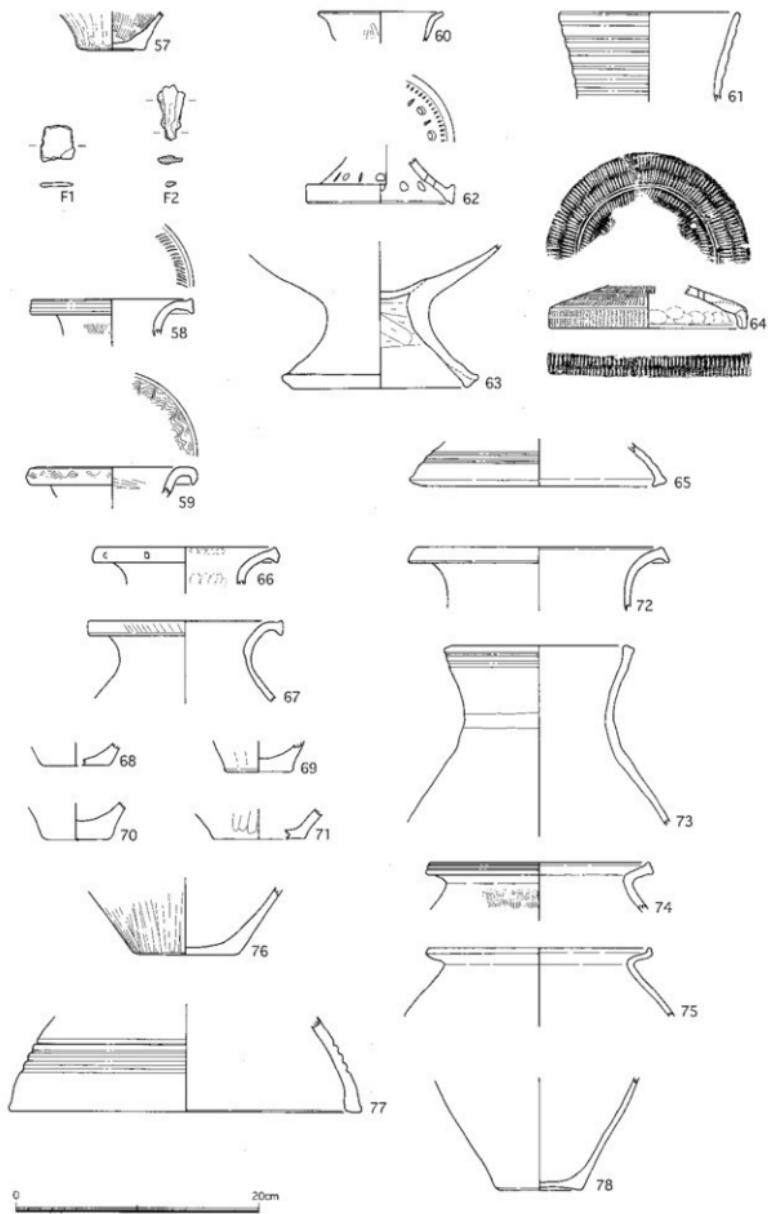
A地区出土土器 ②



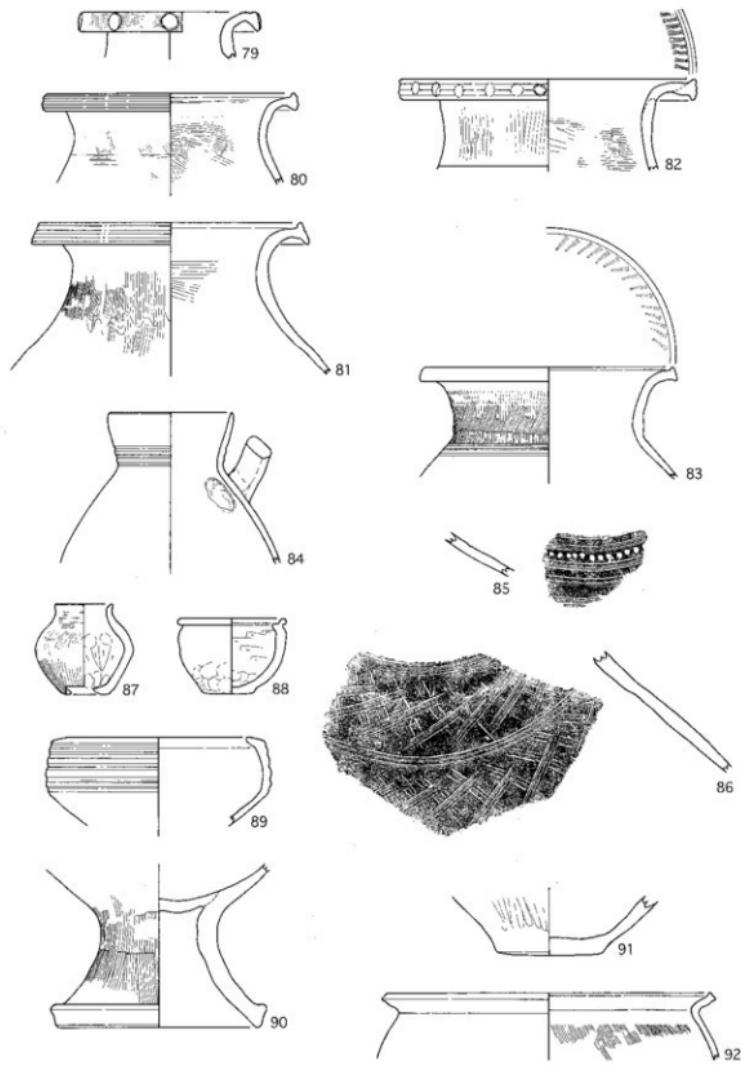
A地区出土土器 (3)



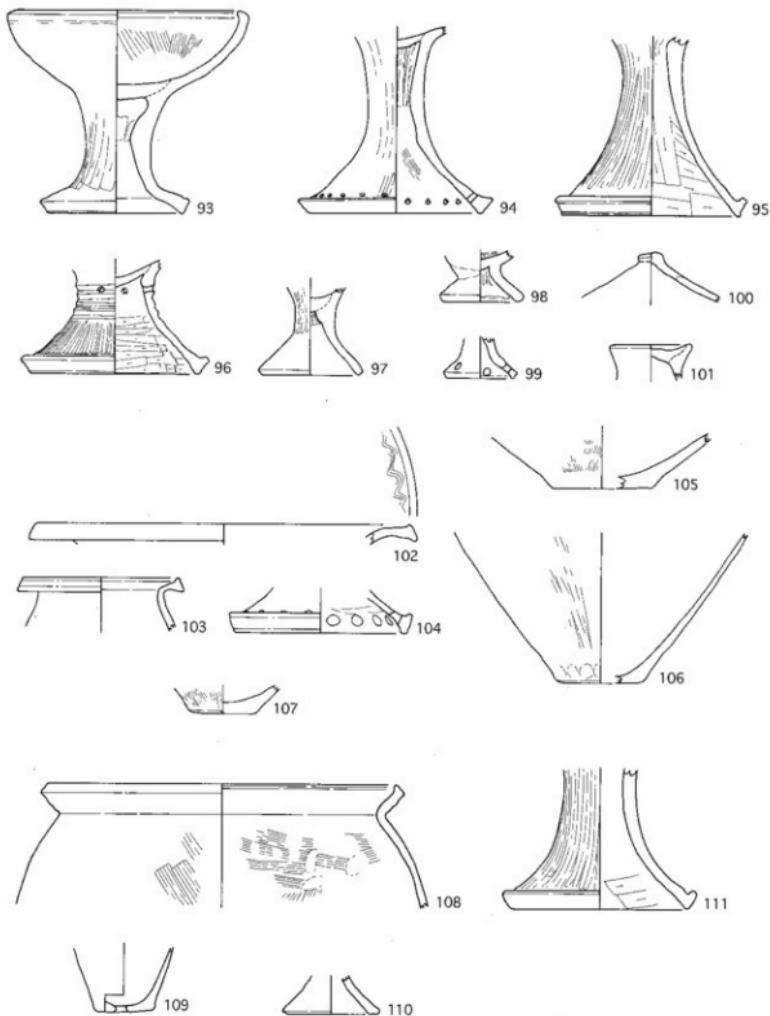
0 20cm



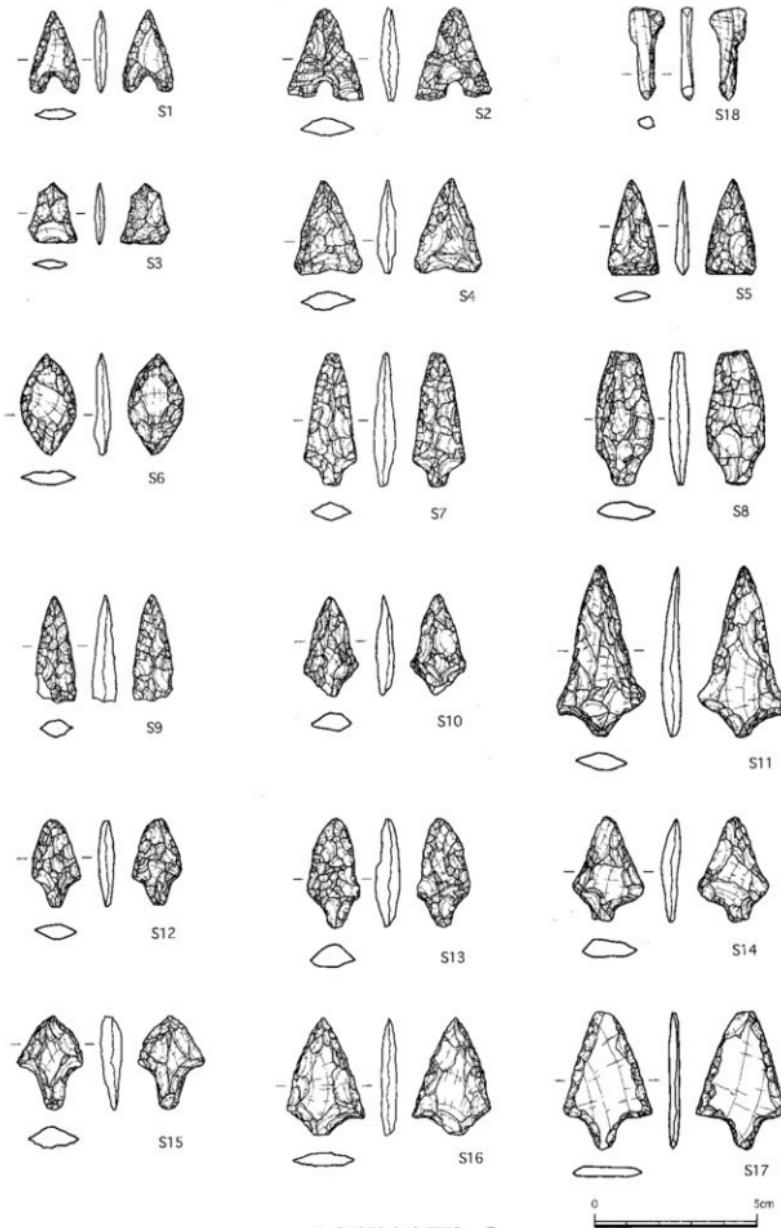
A地区出土土器 (5)



0 20cm

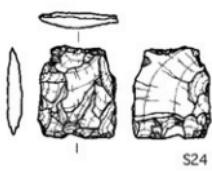
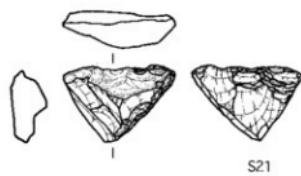
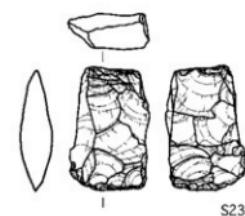
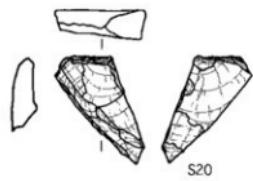
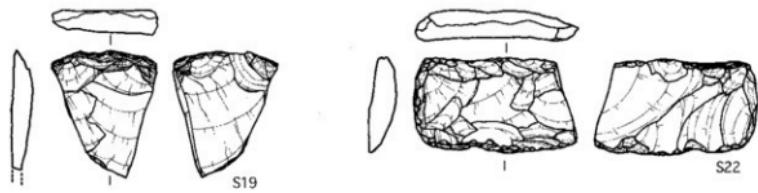


0 20cm

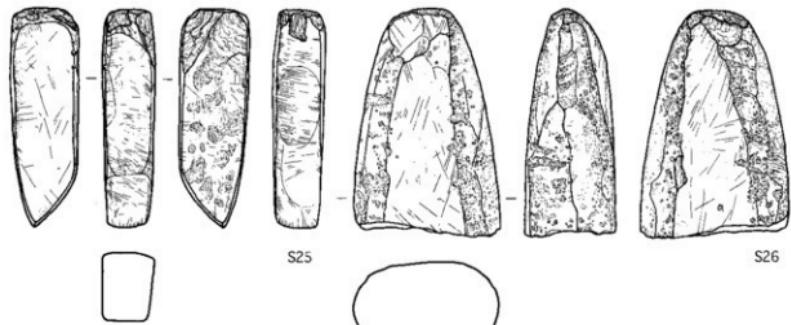


有鼻遺跡出土石器 ①

0 5cm

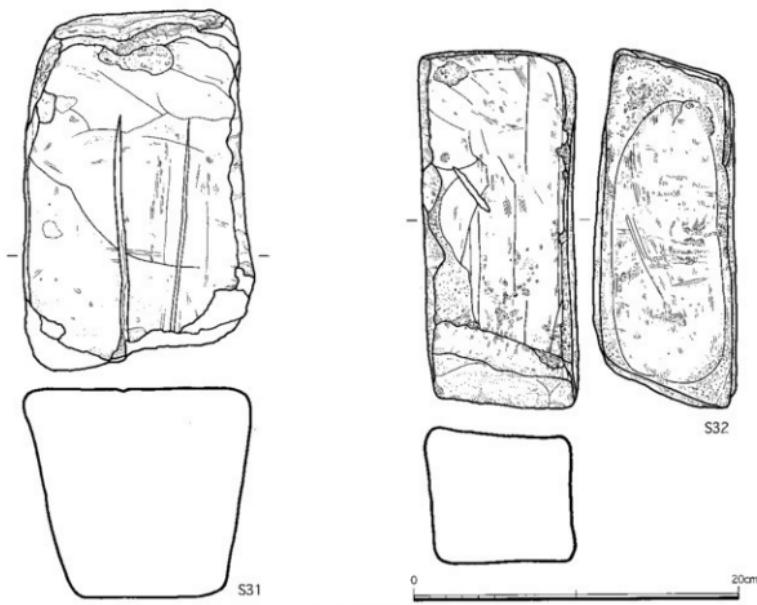
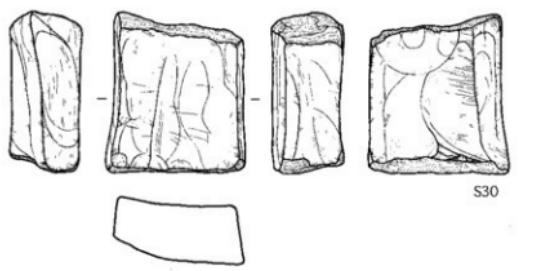
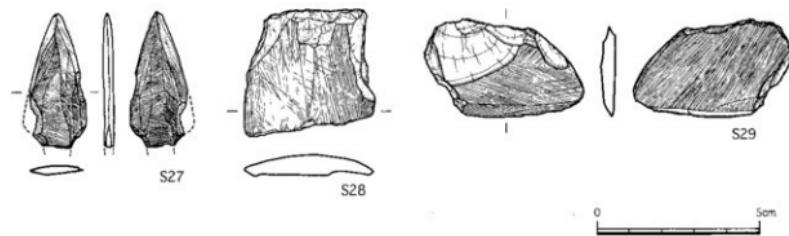


0 5cm

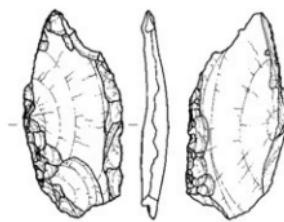


0 10cm

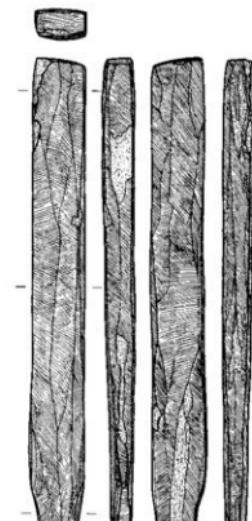
有鼻遺跡出土石器 ②



有鼻遺跡出土石器 ③



S33



S34



S35

0 5cm

0 20cm

風呂ヶ谷城出土土器

写真図版



有鼻遺跡・風呂ヶ谷城全景（上空から）

図版2 有鼻遺跡・風呂ヶ谷城



遺跡遠景
(南から)



遺跡遠景
(北から)



A・B 地区近景
(上空から)



C 地区近景
(南から)

図版4 有鼻遺跡 造構



A地区南側
(東から)



A地区北側
(東から)



B地区南側
(西から)



竪穴住居64
(南西から)



竪穴住居64
中央土坑断面
(南西から)



竪穴住居64
(北東から)

図版6 有鼻遺跡 遺構



堅穴住居64内
炉状遺構1
(北から)



堅穴住居64内
炉状遺構2
(南から)



堅穴住居71
(北から)



堅穴住居72
(北から)



堅穴住居72
中央土坑
(北から)



堅穴住居73
(北から)

図版8 有鼻遺跡 遺構



堅穴住居74
(北から)



堅穴住居75
(北から)



堅穴住居76
(北から)



段状遺構87
(北から)



段状遺構88
(北東から)



段状遺構88
(北から)

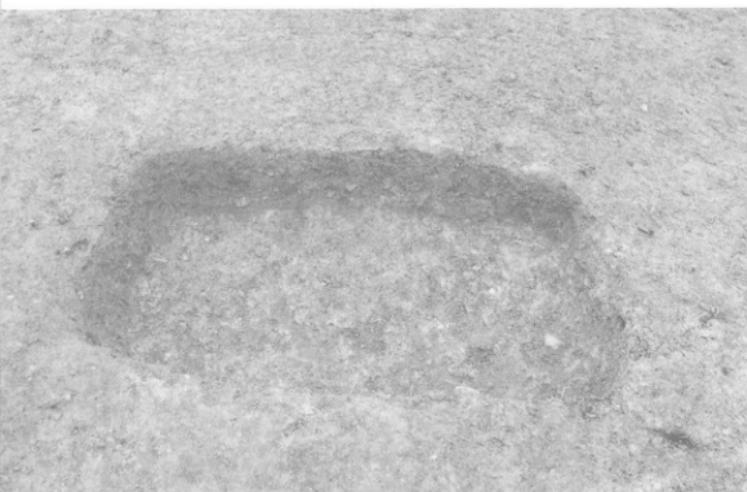
図版10 有鼻遺跡 遺構



溝2
(東から)



溝2
土層断面
(東から)



土坑7
(東から)



土器埋設土坑 7
検出状況
(真上から)



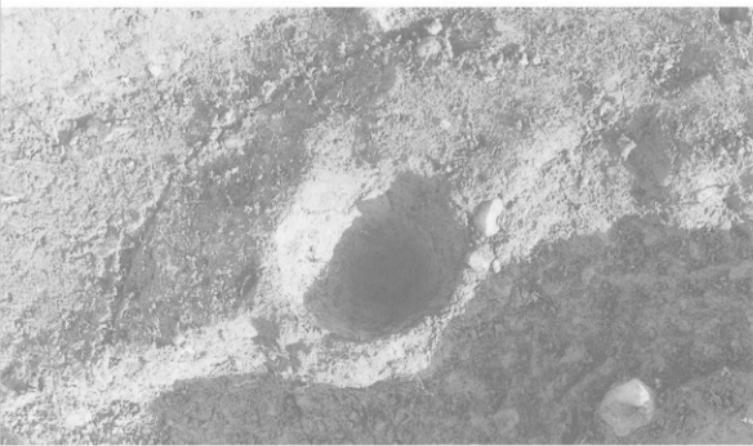
土器埋設土坑 7
半截状況
(北から)



土器埋設土坑 7
埋土除去状況
(北から)



土器埋設土坑 8
検出状況
(北西から)



土器埋設土坑 8
完掘状況
(北西から)



P 1
土器出土状況
(南から)



風呂ヶ谷城・
有鼻遺跡
遠景
(上空から)



風呂ヶ谷城
遠景
(上空から)

図版14 風呂ヶ谷城



風呂ヶ谷城
遠景
(上空から)



風呂ヶ谷城
近景
(西から)



堀切1・溝1
土層断面
(南西から)



堀切1
土層断面
(西から)



堀切1の土壌
土層断面
(西から)



調査中の支援職員 (①・②・③)



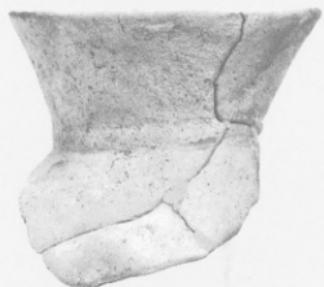
調査中の 1 コマ (④・⑤)



確認調査出土土器



A地区包含层出土土器①



20



23



25



24



29



31

A地区包含層出土土器②



33



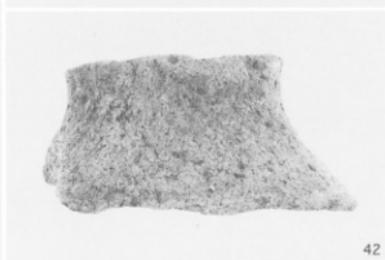
38



41

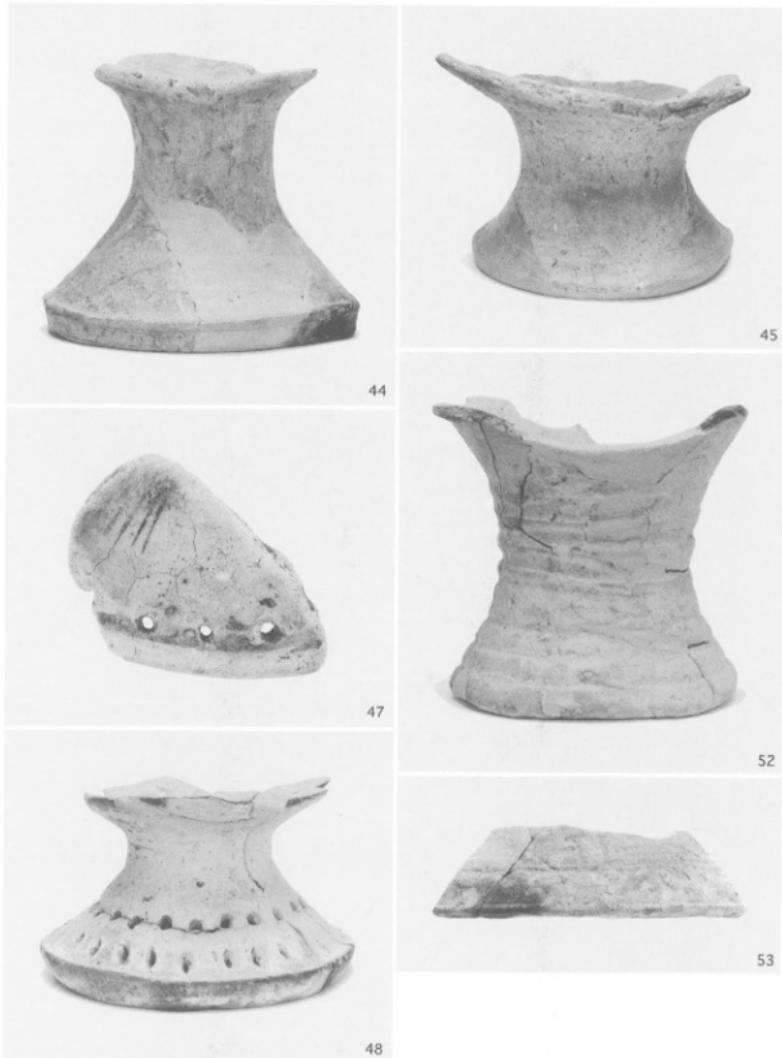


40



42

A地区包含層出土器③



A地区包含層出土土器④



54



55



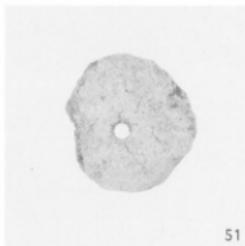
56



18



17



51

A地区包含層出土土器⑤



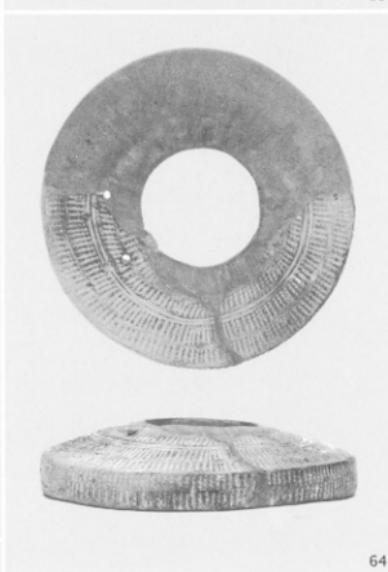
57



63



58



64



59

竪穴住居72 出土土器



66



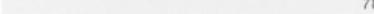
76



70



112



78



F1



F2

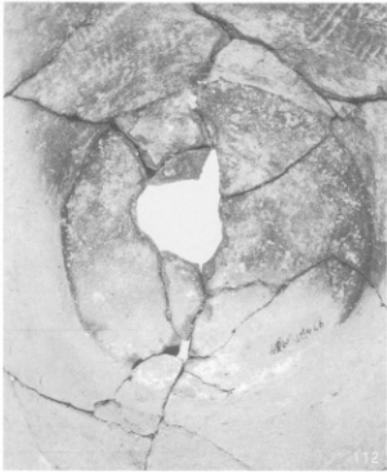
P1出土土器(66,70)

土器埋設土坑8(78)

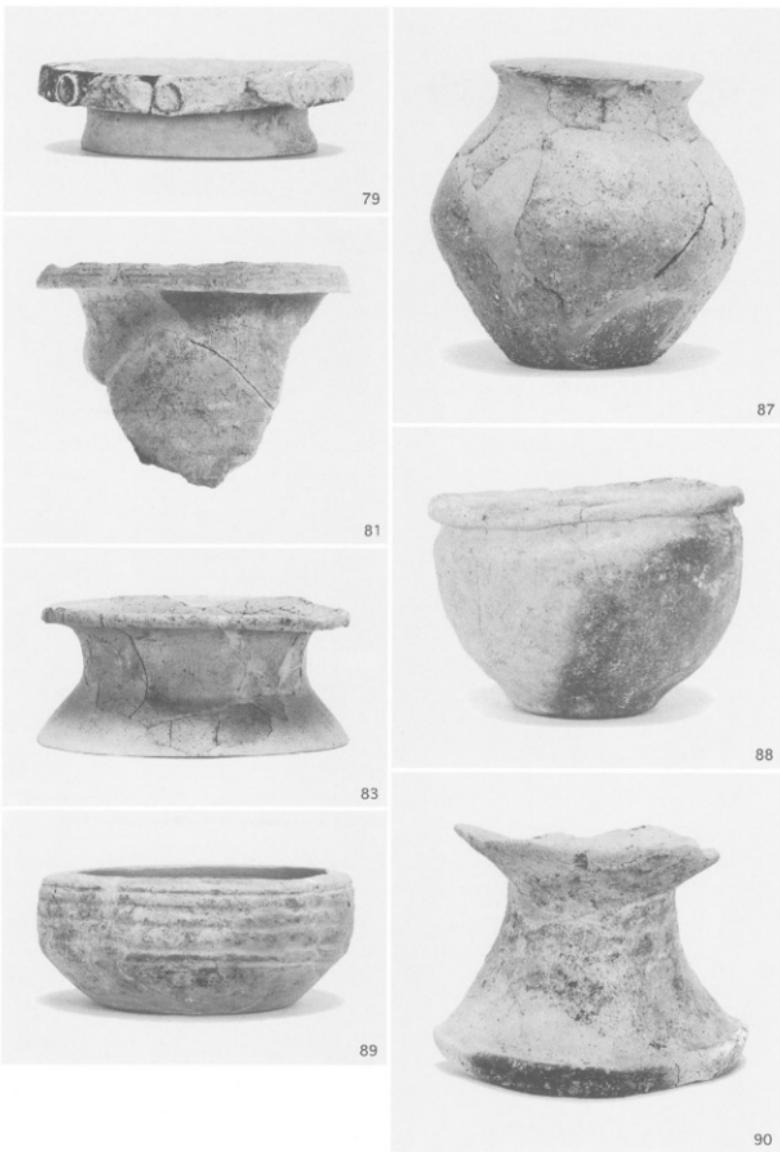
金属器(F1,F2)

溝 2 (76)

土器埋設土坑 7 (112)



112



B地区包含層出土土器①



93



95



94



96



97



98

B地区包含层出土土器②



99

101



85

B地区包含層出土土器③

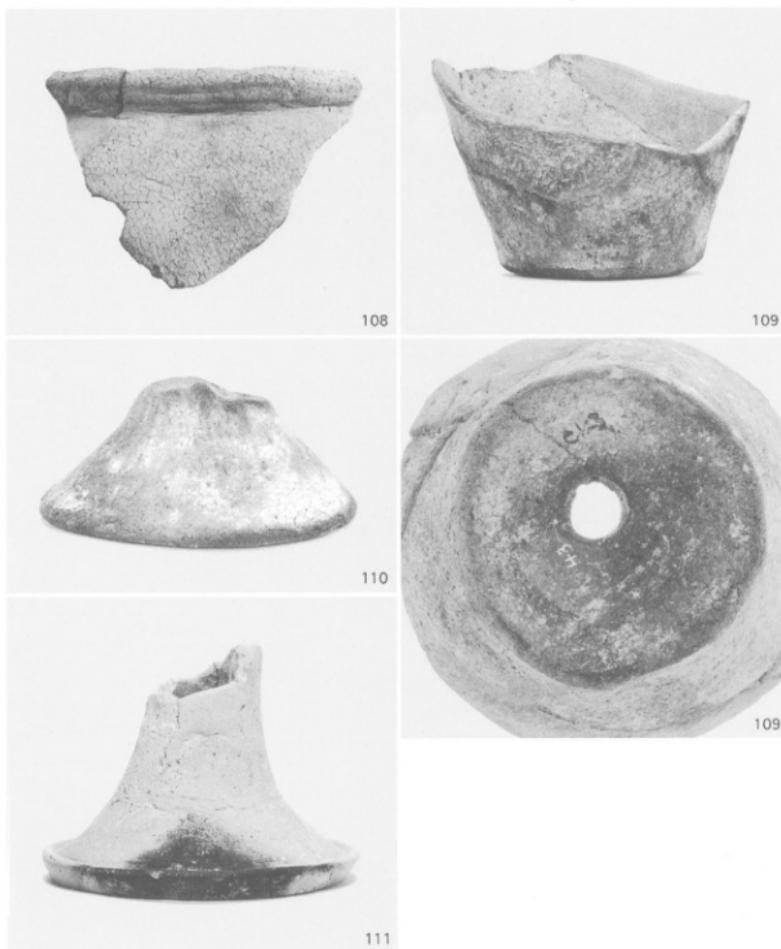


102



107

堅穴住居74 出土土器



C地区包含层出土土器



113



116



114



117

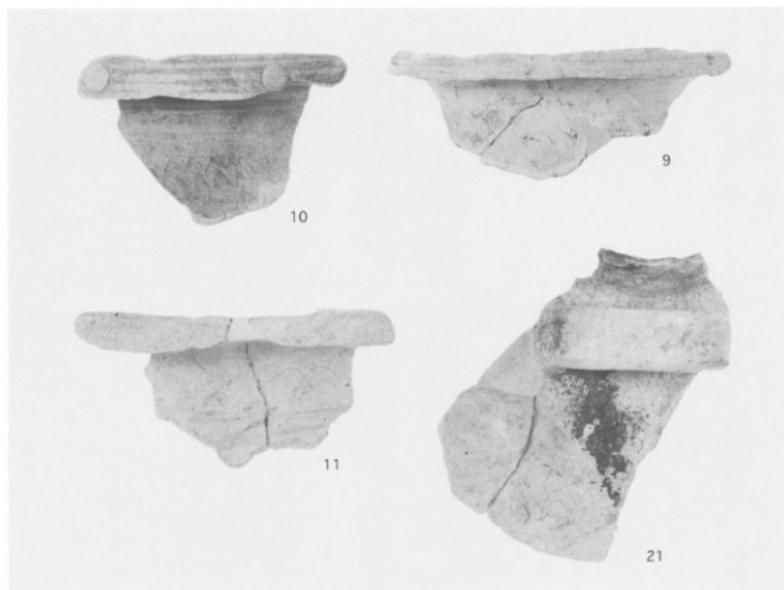


115

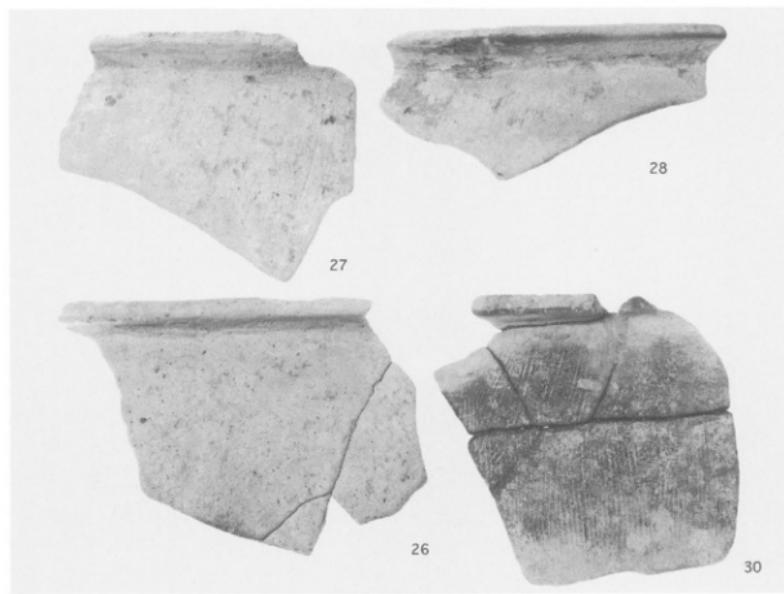


118

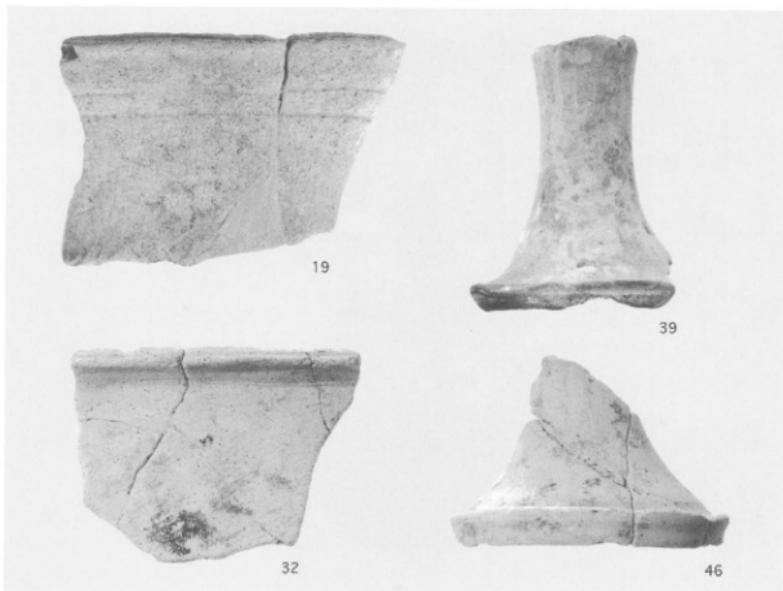
風呂ヶ谷城出土遺物



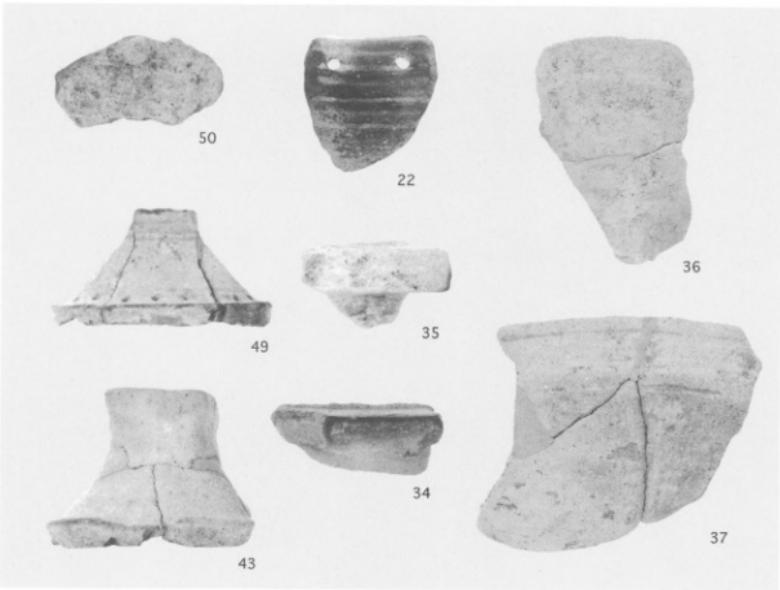
A地区包含層出土土器①



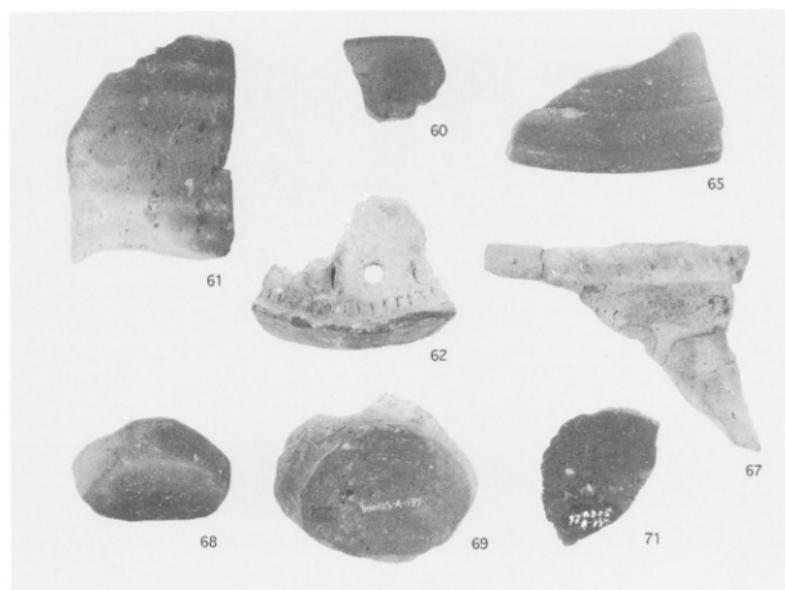
A地区包含層出土土器②



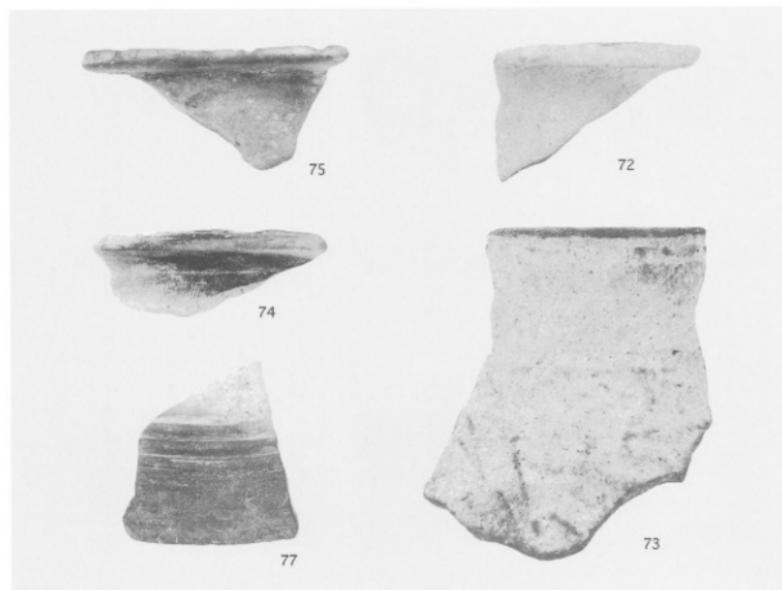
A地区包含層出土土器③



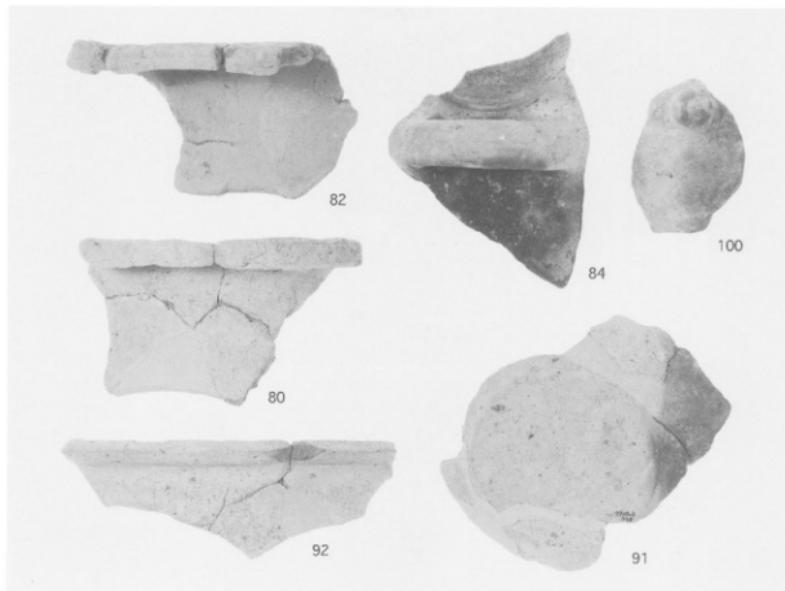
A地区包含層出土土器④



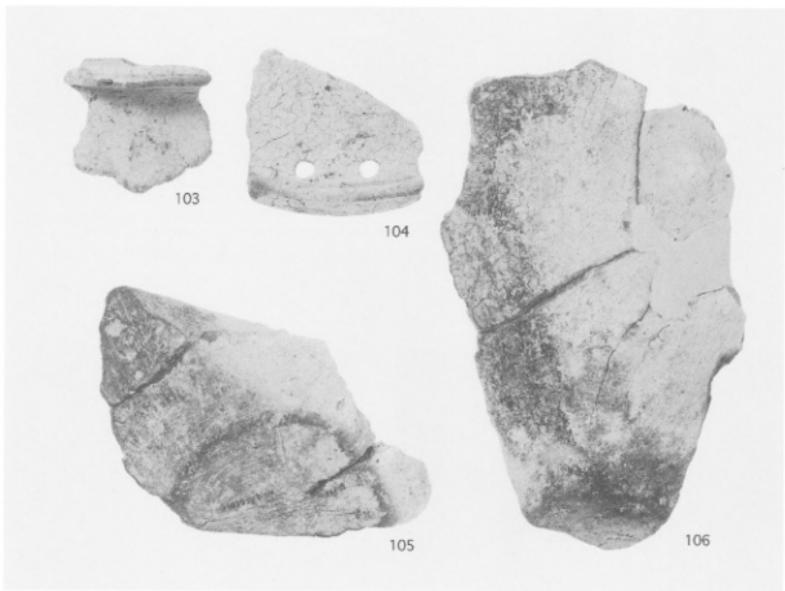
堅穴住居71(65), 堅穴住居72(60.61.62), P 1 (67.68.69), P 2 (71)



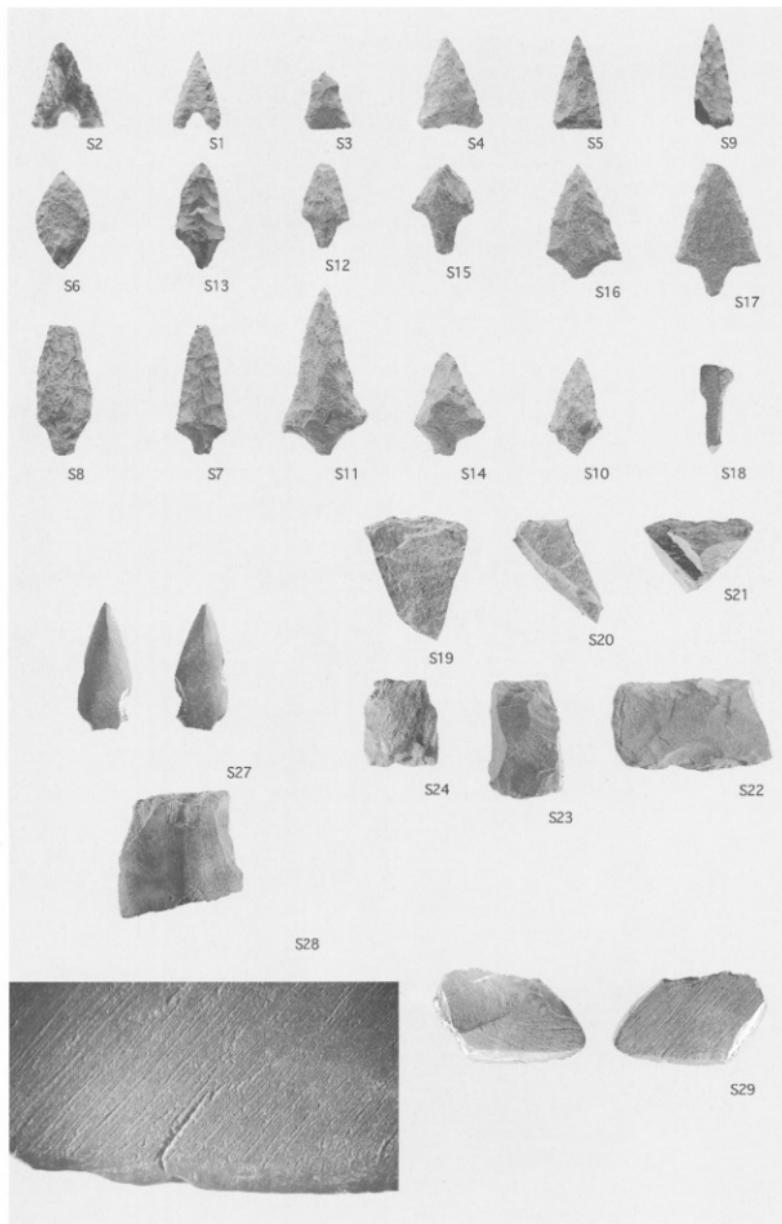
溝2 出土土器



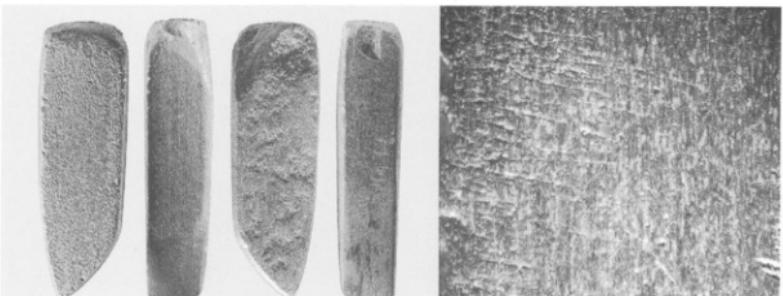
B地区包含層出土土器



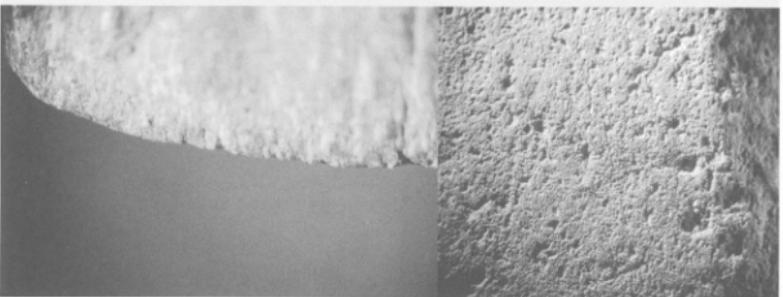
堅穴住居70 出土土器



有鼻遺跡出土石器①・石包丁顕微鏡写真

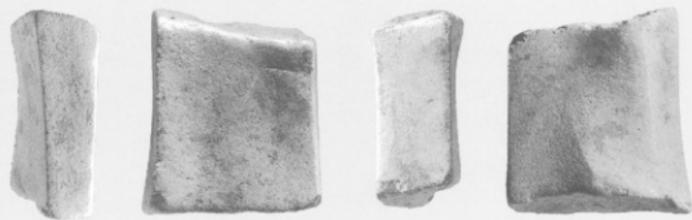


S25



S26

有鼻遺跡出土石器②・磨製石斧顎微鏡写真



S30



S32



S31

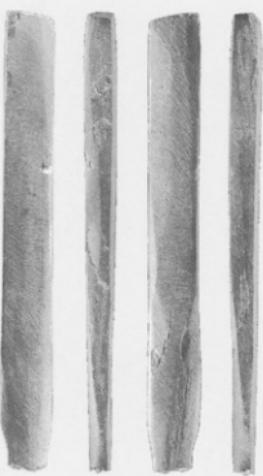
有鼻遺跡出土石器③



S33



S35



S34

兵庫県文化財調査報告 第198冊

北摂ニュータウン内
遺跡調査報告書VI

—有鼻遺跡(2)—

平成12年3月30日発行

編 集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号

TEL 078-531-7011

発 行 兵庫県教育委員会

〒650-0011 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印 刷 大神印刷株式会社

〒650-0046 神戸市中央区港島中町2丁目2番1-5